

日 本 体 育 学 会

体育心理学専門分科会会報

第 21 号 (通卷第 49 号)

体育心理学専門分科会

2009 年 8 月発行

日本体育学会体育心理学専門分科会会則

- 第1条 本会は、日本体育学会、体育心理学専門分科会と称する。
- 第2条 本会は、体育・スポーツに関する体育心理学研究の発展のため、会員相互の情報交換を行い、研究と支援を推進することを目的とする。
- 第3条 本会は、第2条の目的を達成するために次の事業を行う。
- (1) 研究会の開催
 - (2) 会報の発行
 - (3) 会員の研究に資する国内、国外の情報の収集と紹介
 - (4) その他、本会の目的に資する事業
- 第4条 本会の会員は、本会の趣旨に賛同する者で、会費を納入した者とする。
- 第5条 本会に次の役員を置く。
- (1) 会長 1名
 - (2) 理事 12名
 - (3) 監事 2名
- 第6条 役員の出選は、次の方法で行う。ただし、末位が同数の場合は抽選とする。
- (1) 会長は、会員の単記無記名投票による最多得票者とする。
 - (2) 理事は、会員の5名連記無記名投票による得票上位者10名とする。選挙とは別に事務局から2名の理事を選出し、庶務・会計を担当する。
 - (3) 理事長は、理事の単記無記名投票による最多得票者とする。
 - (4) 監事は、会員の中から会長が委嘱する。
- 第7条 役員任期は、4月1日より翌々年の3月31日までの2年間とし、2期の重任を限度とする。ただし、事務局選出の理事はこの限りでない。
- 第8条 本会に理事会を置き、会長および理事をもって構成する。
- 第9条 理事会には、業務を円滑に遂行するため、次の委員会を置く。
学会大会委員会、企画委員会、広報委員会、庶務・会計委員会
ただし、庶務・会計委員会は、事務局選出の理事が担当する。
- 第10条 会務を補佐するため、会長の指名により幹事若干名を置くことができる。
- 第11条 本会の会議は、総会および理事会とする。
- 第12条 総会は、次の事項を審議決定する。
- (1) 役員の出選
 - (2) 事業報告および収支決算
 - (3) 事業計画および収支予算
 - (4) 会則の改正
 - (5) その他
- 第13条 総会は年1回、日本体育学会の開催地で開催し、当日の出席会員をもって構成する。
- 第14条 本会の経費は、会費、日本体育学会の補助金ならびに寄付金の収入によって支出する。
- 第15条 本会の会計年度は、日本体育学会終了日より翌年の体育心理学専門分科会総会までとする。
- 附則 1. 本会の事務局は、総会の議を経て決定する。
2. 本会は、日本体育学会の依頼により、日本体育学会関連役員等を選出する。
3. この会則は、平成14年10月18日から施行する。

体育心理学専門分科会の役員（敬称略）

任 期：平成19年4月1日～平成21年3月31日

会 長：菅原 公宏

理事長：斎川 政夫

理 事：学会大会委員会（○中込 一郎、荒木 雅信、土屋 裕睦）

企画委員会（○石井 潤信、伊藤 政展、鈴木 壮）

広報委員会（○吉田 茂、佐久間 泰夫、竹中 晃二）

庶務・会計委員会（○谷口 幸二、高野 憲一）

○：委員長

監 事：栗木 一博、舘見 和幸

幹 事：松本 秀夫

第12回国際スポーツ心理学会がモロッコのマラケシュで開催された。今回の学会は次回の国際学会を日本へ招致する大きな目的があり、小生も期待をもって参加した。しかし、残念ながら中国の次回開催がISSP理事会で決定される結果となり、開催に向けてのわれわれの強い熱意は実らなかった。今回このような結果になって、あらためて学問の世界における国際関係の難しさを痛感したし、また同時にこれからの我々の取り組むべき課題も明らかになったように思える。

体育・スポーツ心理学の領域では1965年に国際スポーツ心理学会が発足し、ローマで第1回の国際大会が開催され、これを契機に1970年代前半に至るまで北米、ヨーロッパ、日本などの先進各国において学会が設立され、これらの先進諸国を中心に国際化の流れが本格化した。ISSPの主要な活動は文字通り、世界におけるスポーツ心理学の発展に寄与することを目的としていた。しかし、その後、国際間における研究交流の場は多様化し、ヨーロッパスポーツ心理学会(FEPSAC)、北米の応用スポーツ心理学会(AAASP)、国際心理学会(IPA)など国際交流を目的とした学会活動が興隆し、従来の一歩化されたISSPの国際的活動に代わり、われわれの国際的活動は地域ごとに複雑に分化する傾向を見せている。このように変化した国際状況の中で、ISSPの活動も変化の兆しが見える。例えば、ISSP発刊のジャーナルに中国語編(電子媒体のみ)が付与されるようになったことなどもその1例である。このような状況変化の中で、われわれとしてはどの

ような姿勢でISSPの活動に参加すべきか改めて考えるべき時期が来ているといえよう。また今回の学会では日本人研究者が多く参加し、研究も発表されていた。しかし、その発表の多くがポスター発表(50件)であり、口頭発表(5件)やシンポジウムでの話題提供はプログラムで見る限り、ほとんどみられなかったのが特徴的であった。国際学会がコミュニケーションの場であるならば、当然のことながらわれわれとしてはもっと積極的に多様な手段でコミュニケーションをとっていくことが必要であると感じた次第である。具体的には我々の学会として、個人の発表だけでなく、シンポジウムや人の条件についても積極的に提案するような方策をとっていくことも今後の課題であろう。また研究論文や学会活動に関する英文での公開も今よりさらに推進していくことが必要である。言うまでもなくこのような国際化推進の方向は我々の広い意味での文化的独自性をいかに確保しながら進めるかという難しい問題を包含している。我が国における体育の意味もこの問題に深く関わっているように思える。特に若手の研究者に対して、いわば“曲がり角”にきているこのような国際化の問題に対し、広い文化的視野に立って将来の方向についての展望をもっていただくことを期待したい。

4年後の中国における国際スポーツ心理学会ではぜひ先述した喫緊の課題を一步でも前進させて、体育スポーツに関する心理学的な領域の発展にわれわれが少しでも寄与できればと願っている。

体育心理学専門分科会会報第21号

目次

巻頭言	i
目次	iii
I. 特別寄稿	
レオナード・D・ザイコフスキー(ボストン大学)	3
II. 日本体育学会第59回大会関連	
1. プレセミナー	
司会：鈴木 壯 (岐阜大学)	13
傍聴記：炭谷 将史 (聖泉大学人間学部)	14
2. キーノートレクチャー1	
題名：教員養成系大学における「体育心理学」の講義をめぐって	
演者：杉原 隆 (十文字学園女子大学)	15
傍聴記：吉澤 洋二 (名古屋経済大学)	16
司会：土屋 裕睦 (大阪体育大学)	17
3. キーノートレクチャー2	
題名：応用実践科学におけるフィードバックの持つ意味 —運動学習研究より—	
演者：山本 祐二 (名古屋大学)	18
傍聴記：早川 琢也 (東海大学大学院体育学研究科)	19
司会：荒木 雅信 (大阪体育大学)	20
4. シンポジウム	
題名：体育・スポーツ場面における個人差・パーソナリティ要因に関わる研究の課題	
司会：中込 四郎 (筑波大学)	21
演者：鈴木 聡 (東京学芸大学付属世田谷小学校)	22
演者：竹之内 隆志 (名古屋大学)	23
演者：荒井 弘和 (大阪人間科学大学人間科学部)	24
傍聴記：滝 省治 (甲子園大学)	25
傍聴記：菅生 貴之 (大阪体育大学)	26

5. 口頭発表	
座長報告	
津田 忠雄 (近畿大学)	27
山本 祐二 (名古屋大学)	29
杉山 佳生 (九州大学)	30
6. ポスター発表	
ポスター発表記	
北山 八与 (日本大学大学院)	31
重藤 誠市郎 (東海大学)	32
金屋 佑一郎 (読売巨人軍ジャイアンツアカデミー)	33
7. 大会参加記	
豊田 則成 (びわこ成蹊スポーツ大学)	34
III. 研究会の活動報告	
スポーツ動機づけ研究会活動報告	
磯貝 浩久 (九州工業大学)	37
スポーツ社会心理学研究会活動報告	
田中ウルヴェ京 ((株)MJ コンテス)	38
臨床スポーツ心理研究会活動報告	
平木 貴子 (国立スポーツ科学センター)	39
メンタルトレーニング・応用スポーツ心理学研究会活動報告	
高妻 容一 (東海大学)	40
運動学習研究会活動報告	
樋口貴広 (首都大学東京人間健康科学研究科)	41
IV. 研究室紹介	
東京工業大学大学院社会理工学研究科 (人間行動システム専攻)	
石井 源信	45
V. 学位論文紹介	
発達障害児と健常児の障害物回避能力に関する研究	
島谷 康司 (県立広島大学保健福祉学部理学療法学科)	51

VI. 研究トピック

Active Children 60 min :

日本の子どもにおける身体活動・運動の行動目標設定と効果の検証

竹中 晃二 (早稲田大学人間科学学術院) 57

VII. 海外情報

海外情報

荒木 香織 (兵庫県立大学) 63

ISSP (国際スポーツ心理学会) 大会体験記 その1

村山 孝之 (金沢大学保健管理センタースポーツ教育部門) 65

ISSP (国際スポーツ心理学会) 大会体験記 その2

村上 貴聡 (東京理科大学) 67

ISSP (国際スポーツ心理学会) 大会体験記 その3

町田 萌 (ミシガン州立大学博士課程スポーツ心理学専攻) 70

ISSP (国際スポーツ心理学会) 大会体験記 その4

中本 浩揮 (鹿屋体育大学) 72

VIII. 日本体育学会第60回大会案内

1. 日本体育学会第60回大会 (広島大学) の内容

2. プレセミナー

テーマ：体育心理学の研究にとって何が重要かー 方法論と研究視点を考えるー

演 者：吉田 茂 (筑波大学) 76

演 者：石井 源信 (東京工業大学) 77

司 会：岡澤 祥訓 (奈良教育大学) 78

IX. 事務局報告

平成20年度事業報告 81

平成20年度体育心理学専門分科会総会・理事会議事録 82

平成20年度総会資料 87

平成20年度役員選挙結果 88

平成20年度決算報告 89

平成21年度予算案 90

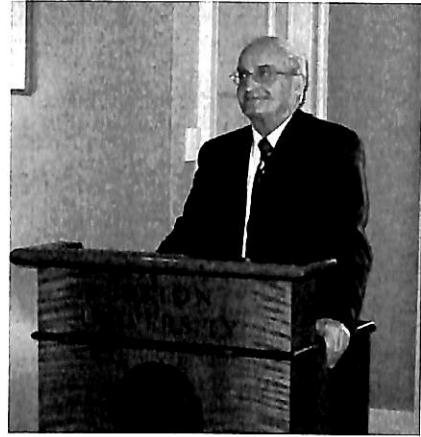
I . 特別寄稿

特別寄稿の著者紹介

Leonard Zaichkowsky, Ph.D.

所属 (ポジション) :

Professor of Education and Graduate Medical Sciences (joint appointment) and head of graduate training in sport and exercise psychology in “Mental Health & Behavioral Medicine” at the BU School of Medicine. Director of Sport Psychology Clinic in the BU Department of Athletics



研究内容 :

Dr. Zaichkowsky は、現在、ボストン大学において新しく開始された学際的プログラム「教育学研究科および医学部医科学研究科のジョイントプログラム」の教授であり、さらに医学部におけるメンタルヘルス・行動医学部門大学院スポーツ・運動心理学プログラムのヘッドである。彼は、長年、応用スポーツ心理学の領域で多くの研究を行ってきたが、とりわけ最近では、脳・神経科学の視点でパフォーマンス強化に果たす実践研究を行っている。その適用は、スポーツ分野だけにとどまらず、芸術や外科手術など、優れたパフォーマンスが必要な様々な分野にもおよんでいる。この研究では、例えば、対象者が感情を自己制御できるように新しいタイプのバイオフィードバック技術を駆使し、その研究対象となる類い希なるパフォーマーはリアルマドリードのサッカー選手 (<http://www.soccer-new-england.com/Real-Madrid-BU-MIT-Join-Forces.html>) をはじめとして、デューク大学医学部における有名外科手術者にも及んでいる。もう一つの研究は、脳イメージ研究である。彼は、カナダ・ナショナルチームに帯同する心理学者と共同で、水泳選手がパフォーマンスに成功、または失敗するイメージを想起させ、その際の脳活動を fMRI スキャナーを用いて測定・分析し、水泳選手のパフォーマンス向上に役立てている。日本体育学会 60 回記念大会において、Dr. Zaichkowsky がコーチ、体育教師およびスポーツ選手に影響をもたらす神経・脳科学研究における最新の知見をわかりやすく紹介してくれることを期待している。

なお、Zaichkowsky 博士は、広島大学で開催される日本体育学会記念大会の特別講演 2 (8月27日: 16:40-17:40) において講演される予定になっております。

特別寄稿

体育・スポーツにおける心理学の発展について思うこと： 学生・院生への教育，応用生理心理学および応用神経科学の出現

Leonard Zaichkowsky, Ph. D.

Professor of Education & Graduate Medical Science

Boston University

(邦訳：竹中晃二)

はじめに，日本体育学会体育心理分科会の会報に寄稿できることを光栄に思います。私は，本稿において，現在，スポーツ心理学が直面しているいくつかの課題について議論していきます。最初に，次世代のスポーツサイコロジストを育てることにに関して話題を提供します。そして，簡単に，ボストン大学の大学院において私たちが行っているトレーニングプログラムについて紹介を行います。次に，応用生理心理学の分野における新しい開発研究のいくつかについて，特にスポーツ科学と体育を勉強する学生のためにバイオフィードバックおよび神経フィードバックについて解説を行います。最後に，来る8月27日に広島で開催される日本体育学会第60回記念大会の特別講演でお話しする内容のいくつかを読者の皆さんにお知らせすることにします。

スポーツサイコロジストが受ける専門的トレーニングとは

次世代のスポーツサイコロジストに対する専門的トレーニングは，私たちが行うべき最も大きなチャレンジの一つです。このチャレンジを行う意味は，スポーツ心理学が心理学，教育，スポーツ科学の間のコラボレーションを必要とする真に学際的分野であるという事実に起因します。大学の研究室は，お互いがコラボレーションして研究や教育を行うというよりはむしろ縄張りを固守するように長く自分たち

の専門分野に閉じこもりがちであり，専門的な組織も学問に固執する傾向があります。このことは，スポーツ心理学にとって大変不幸なことです。なぜなら，スポーツ心理学には多くの学問領域で専門化，発展してきた知識が必要とされているだけでなく，スポーツ心理学者として働く際に必要な倫理を理解することも重要であり，さらにはスーパーバイズされたインターンシップの経験も要求されるからです。

スポーツ・パフォーマンス心理学の世界に影響を与えてきたもう一つの要因は，最近の「エグゼクティブ/パーソナル・コーチング」産業の爆発的な発展（少なくとも北米において）です。コーチング組織の一つ，国際コーチング連盟（International Coaching Federation：ICF）は，70国，9,500名以上の会員を擁する非営利的な専門組織です（詳細は，www.coachfederation.org/ICF/）。この組織では，次のような声明を出しています。「プロのコーチは，クライアントが彼らの個人的生活やプロとしての生活において満たされた結果を作り出す援助を行えるように，現在行っているパートナーシップを供給する。コーチは，人々のパフォーマンスを改善させ，彼らの生活の質を増強させる。」この連盟はまた，「コーチは，クライアントのために，話を聞く，パフォーマンスの強化方略を開発し，サポートを行う訓練を受けている」とも述べています。このくだりは，まさにコンサルティング・スポーツサイコ

ロジストが何を行うかを問われているのに似ています。

現在では、いくつかのコーチング組織が独自でパーソナル・コーチの証明書を出しており、実際、「パーソナル・コーチング」の分野は広範囲な人々にとって魅力的なものとなっています。その人々のうちでも、マネージドヘルスケアなどの官僚主義的制度に飽き飽きしており、新しいタイプのクライアントを望んでいるベテランの臨床心理士がおり、彼らは若干の形式的教育を受けてパーソナル・コーチの証明書を手にします。この事態は、もちろん、多くのスポーツサイコロジストにとって競争にさらされるわけで、なぜならこれらパーソナル・コーチの証明書が、スポーツの世界で専門的技術がある証明であると信じられているからです。

エグゼクティブ/パーソナル・コーチの急成長に加えて、スポーツ心理学のトレーニングと競合する内容として、「ポジティブ・サイコロジー」と呼ばれる心理学の新しい部門が北米において根付きつつあります（参考：www.sas.upenn.edu/CGS/graduate/mapp）。Maetin Seligman は、米国心理学会の前の会長であり、Mihalyi Csikszentmihalyi とともにペンシルバニア大学の著名な心理学者ですが、彼は1990年代の後半にポジティブ・サイコロジー運動を提唱しました。ポジティブ・サイコロジーの目標は、病理学よりはむしろヒトの経験についてのポジティブな様相を研究することで、生活の質感を改善したり、理想的には病気の予防に導くヒトの強みや回復力を調べることです。ポジティブなヒトの強みとは、希望、知恵、創造性、勇気、精神性、責任、忍耐、笑い、精神的タフネスなどの長所を意味します。このポジティブ・サイコロジーは、スポーツサイコロジストが長年行ってきたことに多く含まれています。

それゆえ、今日のパフォーマンス・エンハン

スメントに関わる専門家は1960年代、また1970年代初期における学界で活躍した第一世代のスポーツサイコロジストとは極めて異なるトレーニングを受けています。この状況は、日本でも同じだと思います。

実際には、現在、世界中でスポーツサイコロジストを養成するほとんどの大学院プログラムは、スポーツ科学科、あるいはスポーツ科学部で実施されています。多くの場合、このトレーニングは包括的で、厳密で、次第に学際的になってきてはいますが、私の考えとして、これらのプログラムは、研究者やアカデミックな部門で働く人、たぶん組織のコンサルタントも含めて養成するには優れてはいても、今日のアスリートを効果的にカウンセリングすることを目的とする大学院生を養成するには適当とは言えないと思います。私は、この分野で30年近く働いており、このうち20年以上はスポーツ心理学の大学院生をトレーニングしてきました。私は、競技スポーツのすべてのレベルで臨床的なケースも激増していることもこの目で見てきました。私のところにやってくるアスリートは、よいアスリートになるためにメンタル面や感情面のコントロールの方略を探しに来るわけではなく、むしろ多くが薬物依存、摂食障害、うつ病のように重大な臨床問題を抱えるクライアントです。そのために、私の大学院プログラムを修正する対策を講じ、院生は臨床という立場で養成でき、しかもライセンス取得という資格のあるものにしようと思いました。修士号レベルで、医学部（医科学大学院）と2年間の連携プログラムを構築しました。私の院生は、パフォーマンス・エンハンスメント、ポジティブ・サイコロジー、スポーツ・運動に関係する環境においてスーパーバイズされた経験に焦点をあてたカリキュラムを履修すべく教育学研究科に入学します。そして、2年目では、彼らは、医学部において、「メンタルヘルスと

行動医学」という厳しい負荷を達成し、メンタルヘルスに焦点を絞ったインターンシップを終了します。

25年の間、私はディビジョンIの競技レベルがあるボストン大学アスレティック・スポーツ局に「臨時的な」立場でサービスを提供してきました。2、3年前には、教員のスーパービジョンのもと、大学院生が個人やチームのスポーツ心理学サービスを提供する手はずを整えました。これにより、アスレティック局は上質のスポーツ心理学サービスを低コストで受けることができ、私たちの院生はスーパーバイズされた経験を受ける場面を得ることができるということで、お互いが「ウインーウイン」の関係になるものでした。大学院生は、主にパフォーマンス関連の問題を持つアスリートを援助し、しかし他の問題として、不安、うつ、摂食障害、薬物依存、怪我、心的外傷後ストレス、心痛/喪失、気分障害もまた問題としてあげられます。

このプログラムの院生は、コースワークおよびインターンシップの要件を無事終了すれば、Licensed Mental Health Counselor（訳者注：マサチューセッツ州における修士コース修了で取得できる臨床心理士資格、他州でも同様の資格がある。ちなみに、ライセンスド・サイコロジストの資格は博士号を取得していないと申請できない）と呼ばれるライセンスに申請することができる。私見ではありますが、これらの院生は、まさにスポーツ心理学のクライアントに対して効果的に対処できる体系的でバランスの取れたカリキュラムを受けています。私は、スポーツ心理学における大学院のトレーニングプログラムをカウンセリング心理学、スポーツ科学、教育学、研究法などを含む学際的トレーニングを形成することで、世界中において優れたものにしたいと考えています。このタイプの横断的大学コラボレーションは、実現可能であり、院生のためにカリキュラムの幅を広げ

ることになります。

これらアカデミックで臨床的なトレーニングを組み立ててきたことでしっかりとした成果もでてきています。日本も含めて世界中からやってきた私の院生は、いまや様々な職業についています。例えば、2名は大学の学長になり、数名は校長になり、他は大学教授、ウェルネスセンター、研究所、学生アスリート支援センターのディレクター、オリンピックトレーニングセンターのサイコロジスト、スポーツ医学センターのサイコロジスト、芸術部門のカウンセラー、スポーツや産業領域のコンサルタントとして働いています。

研究の重要性

最後に大学院のトレーニングに関して、私たちが専門とする仕事をどのように実践するかを決定するために研究の役割を強調することは重要なことです。今日、多くの専門領域における研究は、エビデンスに基づく研究（evidence based research）の重要性を強調しています。このことは、院生にトレーニングを提供する側が、歴史や伝統、通説ではなく、確かな研究から導き出された情報を用いて教育し、クライアントにカウンセリングを行い、組織のコンサルティングを行わなければいけないことを意味しています。私は、理論、臨床経験、研究方法論のほどよいバランスを院生に身につけてほしいと願っています。

スポーツ心理学や体育は、「エビデンス、あるいはデータに基づいた実践」をより多く必要としています。私たちは、今や、メンタル・プラクティスを行うときに何が起きているのかという確証を得るための方法論を持つに至っています。最近、「新しいスポーツ心理学のケース：応用生理心理学とfMRI神経科学（A Case For a New Sport Psychology: Applied Psychophysiology and fMRI Neuroscience

)」というスポーツ心理学の本の章を執筆しました。バイオフィードバック、ニューロ・フィードバック（訳者注：脳波のバイオフィードバックは、特別にneurofeedbackと呼ばれている）および機能的磁気共鳴画像（fMRI）の脳イメージングに関連するテクノロジーはすばらしい進歩を遂げ、アスリートが自身のスポーツについてトレーニングしたり、競争したりする際の中枢神経組織（脳を含む）と自律神経組織に何が起きているかを証明できるようになりました。私の考えでは、ニューロ・フィードバックおよびfMRIの研究は、スポーツ科学の応用分野で次世代の最先端研究になると思います。

私は、1975年以来、スポーツ領域でバイオフィードバック研究とその応用を行ってきました。しかし、スポーツの世界では、バイオフィードバックをメンタルトレーニングのツールとしてスピーディに受け入れられてきたわけではありません。バイオフィードバックとニューロ・フィードバックが新たに興味を持たれたのは、たぶんACミランのスポーツサイコロジストであるBruno DeMichlisがMindRoom（訳者注：生理心理学実験室の呼称）を使用していることを、2007年にベルリンで開催されたヨーロッパ・バイオフィードバック学会第11回大会で発表されたことに始まると思います。彼は、2006年のヨーロッパ・チャンピオンシップでACミランが優勝したときに使用していたプロトコルについて話をしました。スポーツとバイオフィードバックのパイオニアの一人、Vieta Wilsonもまた、カナダにおいてエリートアスリートのもとで仕事をしていました。それ以来、他のスポーツ科学者もスポーツ場面にバイオフィードバックを持ち込んで相当の成功を収めてきました。カナダのスピードスケート協会が働くスポーツ科学者、Pierre Beauchampは、カナダにおけるナショナルレベルのトレーニングにバイオフィードバックとニューロ・フィ

ードバックを成功裏に取り入れてきました（個人的な情報交換、2009年4月2日）。南アフリカのスポーツ心理学者であるTimothy Harknessは、北京オリンピックのエアライフル射撃で、初めてインドにおいて金メダルに輝いたAbhinav Bindraのトレーニングにバイオフィードバックを適用し、かなり高い評価を得ました。このことについては、オリンピックとともに多くのメディアの注目を得ましたが、Harknessは、2009年4月に開催された応用生理心理学・バイオフィードバック学会の第40回大会で彼が使用したプロトコルについて詳細で科学的な確証を示しました。同じ大会で、Louis Crokaは、ナショナルフットボールリーグのチームにバイオフィードバックプログラムを実践して効果を上げたことを報告し、Harry van der Leiは、ディビジョンIのゴルファーに心拍変動トレーニングの効果を見せています（AABP, 2009）

Harknessは、オリンピックに先立ち、Bindraに対して150時間を超えるバイオフィードバック・トレーニングを行わせました。彼は、ニューロ・フィードバックと他の3つのバイオフィードバック・モダリティ（心拍変動、筋電位、皮膚電気反射）について詳細に述べ、3モダリティのバイオフィードバックの訓練効果が高いことを示しています。Bindraは、ニューロ・フィードバックを用いて、射撃前に気持ちを落ち着け、リラックスし、集中し、感情コントロールを行うことを学習したのです。Bindraにとってニューロ・フィードバック訓練の目標は、Cz領域における θ 活動を減じて β 活動を増加させ、内言（音声には出ない思考言葉）を減少させるT3領域（ブローカ領）での低周波 α （8-10Hz）成分を増強させることでした。CzやT3の領域名は、標準的な電極装着部位である国際10-20システムによるものです。これら電極装着部位名は、大脳半球の部位を特定する

アルファベットと、左右半球いずれかを示す数字の添え字で示されています。また、EMG フィードバックは、Bindra に対して、自分の姿勢制御に関わる主たる筋の活動性に気づかせ、リラクゼーションを維持するのに用いられました。心電図と呼吸のフィードバックによって、この射撃手は呼吸性不整脈の大きさに気づきました。事実、心拍数と呼吸の乱れが、失敗射撃を見事予測するものとなりました。

最近、スペインのリアルマドリッドフットボールクラブが新しいトレーニング施設を建て、その中に彼らのアスリートすべてのトレーニングのために大きなスポーツ科学センターを含めました。センターの中には、神経生理学実験室があり、私とそのデザインを支援しています。その実験室は、MindRoom のリアルマドリッド版です。リアルマドリッドは、スポーツ科学に焦点を絞った一環として、ボストン大学とマサチューセッツ工科大学とジョイント科学的協定を交わしました。私たちの目的は、お互いの機関が恩恵を受けるように研究を共同で行うことです

(<http://www.soccer-new-england.com/Real-Madrid-BU-MIT-Join-Forces.html>)。私は、日本体育学会におけるキーノートにおいて、この独創的で、たぶん歴史的な協定について述べるつもりです。私たちの共同研究は、単にエリートアスリートのパフォーマンスに応用されるだけでなく、全世界における市民の体力レベルが低下している問題にどのように対処できるか、また私たちの専門的研究が体力、肥満、生活の質感という問題に対してどのようにアプローチできるかについては興味深いところです。

私は、またバイオフィードバックや神経フィードバックのトレーニングに関する考え方を医療トレーニングの世界にも応用したいと考えています。事実、デューク大学医学部の外科

部門から、医師となる次世代の人たちがプレッシャーのかかる状態でよいパフォーマンス（手術）ができるようにトレーニングプログラムをデザインして欲しいという依頼がありました。私は、このチャレンジを楽しみにしており、学会では皆さんと情報を交換したいと考えています。

fMRI は、脳の構造や機能について高質な像を造り出すために磁場を使用する比較的新しい科学です。私の共同研究者である Davis の論文は、エリートアスリートのパフォーマンスをよく理解するために fMRI の方法を使用した最初の研究であると思います。Davis は、様々なスポーツのもとで仕事をしてきたサイコロジストとして、多くのアスリートが予想よりも低い結果を出したり、失敗して落胆を経験した後に、プレイを「やめてしまう」（訳者注：諦めたように、またどこか怪我をしたように急にパフォーマンスがうまくできなくなってしまうこと）ことを観察してきました。彼らは、元気を取り戻すことができなかつたのです。Davis は、ヒトのうつ病に関して専門的な知識を持っているために、落胆に続く貧弱なパフォーマンスは、運動システムに影響を与える否定的な感情によって生じているのではないかという仮説をたてました。Davis は、うつ病の神経科学のエキスパートである、エモリー大学の Helen Mayberg やサイモンレイザー大学の Mario Liotti のような神経科学者から助言を受けました。その後、彼は、13 名のカナダ・オリンピックレベルの水泳選手のうち、パフォーマンスが成功した数名とパフォーマンスに落胆した数名を対象に研究を行いました。選手は、2 つのビデオクリップによって誘発された脳活動を見ました。1 つはその選手が失敗したビデオとコントロールビデオは違う選手のビデオでした。その結果、選手が自身の失敗パフォーマンスを見たときには、脳の感情中枢がうつ病を

経験している被験者のものと似ており、これはかなり驚くべき発見でした。否定的な感情は、前帯状と海馬傍回における fMRI 活動と相関関係がありました。否定的感情はまた、前頭皮質中央、頭骨頭頂部、運動感覚、一次運動野-水泳に必要な身体動作をプランする領域の活動低下をもたらしました。Davis は、アスリートに将来のパフォーマンスを修正することに影響する 20 分間の認知行動介入プログラムを施した時、アスリートにおける否定的感情と相当の BOLD 信号において有意な逆転現象が生じることを発見しました。Davis は、失敗に関係する否定的感情は、運動野を抑制し、その後、パフォーマンスに悪影響を与えているのかもしれないという仮説を持ちました。私は、過去 2 年間、Davis とチームを組み、ボストン大学イメージングセンターにおいて、エリートアスリートを被験者に用いて一連の研究を行ってきました (Davis, Zaichkowsky & Kim, 2007)。この研究はまた、脳の感情システムと運動プランニング領域の間の関係を調べるために拡散テンソル・イメージング (訳者注:; diffusion tensor imaging: DTI) も付加して見えています。私たちは、この研究によって、選手が落胆したその場で何か短期間の介入を行い、そのことで脳の前頭葉と運動野をジャンプ・スタート (訳者注: バッテリーの上がった車に別のバッテリーを接続してエンジンをか

けること、ここでは再活性化させるという意味) させることができるかを調べることもできます。これらの研究を行うことで、選手が落胆後のパフォーマンス低下を予防するためには、彼らが伝統的な認知行動的介入を必要とするのではなく、むしろ何か集中的に身体活動を行うことで肯定的な結果をもたらす可能性を示してくれるかもしれません。この研究は、スポーツ心理学領域の進展に大いに期待できる材料となるでしょう。日本体育学会の講演では、この研究についてもう少し詳しく話したいと思っています。皆さんとお目にかかることを楽しみにしています。

文献

Davis, H., Zaichkowsky, L., Kim, D. (2007) Challenging traditional training paradigms to enhance performance. Paper presented at SPIN Conference, Victoria, British Columbia, September, 2007.

Zaichkowsky, L. (1994). Biofeedback and imagery assisted self-regulation training in sports: research evidence and practical application. In Tsutsui, S. & Kodama, M. (eds.) *Biobehavioral self-regulation in the east and west*. Tokyo: Springer-Verlag Inc.

Ⅱ. 日本体育学会第 59 回大会関連

鈴木 壯 (岐阜大学教育学部)

今回のプレセミナーを企画し、司会ができたことは幸運だった。体育心理専門分科会のプレセミナーの企画を担当することになったとき、最初は自分の専門領域である臨床心理学関連のテーマを考えた。しかし、それは参加される方の多くにとってわかりやすく・関心が持たれやすいテーマではないかもしれないと思った。そこで、体育心理学専門分科会なのであるから、それにふさわしく、なおかつ体育の現場に関連する話しをしていただけの方がいいだろうと考えた。そして、それに適任の方は奈良教育大学の岡澤祥訓先生であろうと思い、お願いすることとした。そうしたところ、快く引き受けていただいた。

当日は、どんな話が聞けるだろうかと期待をしつつも、参加される方が何人になるか実は心配をしていた。しかし、開けてみると 80 名を越える方の参加があり、盛会であった。話された内容は体育心理学の知見を体育の現場にどう活かすかというテーマで、理論を实践にどうつなげるかという非常に重要な内容であった。これまでの研究成果を経年的に話されるのをお聞きしていると、そのテーマで 20 数年エネルギーをかけて真摯に取り組んでこられたことが伝わってきた。聞いていて大いに心を動かされた。研究者とはこう

いう姿勢であらねばならないのだろうと思った。その姿勢から多くのことを学ぶことができた。理論と実践をつなぐということは「言うは易し」であるが、実際にはそれほど簡単なことではない。岡澤先生はそれを非常に苦勞されながらも、現場の先生との交流を通じて実践されてきていた。私にとってはその姿勢から大いに学ぶことができた。

ディスカッションに入ると、間髪を入れずに手が挙り、参加された方々も触発されていることが伝わってきた。体育心理学領域の研究者ばかりでなく、現体育科教育の研究者や実践者にとっても大いに触発される内容であったに違いない。

さらに感心させられたのは最後に述べられたことである。ディスカッションの中で質問に応え、討議し終えた最後に、岡澤先生ご自身が「大きな刺激を受けた、これからも頑張ると思う」と述べられたことである。研究者として 50 歳を過ぎると、あまり研究をせず、それまでの貯金でやられる方が多いなかで、岡澤先生のような姿勢は学ぶべきであり、年齢に関係なく失ってはならないことである。

多くのことを学び、触発されたプレセミナーだった。

日本体育学会第 59 回大会初日、秋の気配漂う心地よい風を背に受け、私が早稲田大学の正門をくぐったのはプレセミナー開始予定時刻の 2 時間半も前のことであった。本大会のプログラムを拝見したときから私は岡澤先生の「体育心理学の知見を授業にどのように活かすか」というご講義を心待ちにしていた。

プレセミナーでは大きく 3 つの視点から議論が展開された。まず“体育現場に生きる実践研究のあり方”として、研究者と現場の教員が互いの特色・専門性を活かすこと、および研究成果を実践につなげる意識を持つことが現場で役立つ実践研究へとつながると指摘された。

次いで、“運動有能感と運動に対する好意度”について、運動の楽しさを体験させるために必要な運動有能感は、「身体的有能さの認知」と「統制感」という内的要因だけで構成されるものではなく、「受容感」（教師や仲間から受け入れられている自信）という、いわば他者との関係という外的要因もその構成要素の一部であることを明らかにされた。

3 つ目は、「運動有能感を高める授業のあり方」という観点から、運動能力の高くない児童が意欲的に体育授業に取り組む方策が検討された。運動有能感を高める 4 つの方策として、1) 教材の工夫、2) 教師行動の工夫、3) 目標設定、4) 社会的責任行動という提示された。現場で実際に児童

と向き合い、児童の望ましい変化を引き出した具体的な授業内容をふんだんに織り交ぜながら、実践・研究の様子が再現された。

フロアの先生方からのご指摘を受けて、岡澤先生が話された内容で印象に残っているものがある。先生は、「介入によって児童が示した『変化』を明らかにするだけでなく、『変化の背景にあるメカニズム』を分析することがより多くのことを明らかにしてくれると考えられる。しかし、このメカニズムに迫ることがなかなか難しい」という主旨のお話をされたように小生は記憶している。この議論は体育・スポーツ心理学領域にとって重要な議論だと考えられた。これまでの実践研究では対象者の A→A' という変化（結果）の報告に焦点が当てられていたが、これからは「→」の部分、すなわちメカニズム（プロセス）を明らかにすることが求められる。生徒（選手）が語る世界や生徒が行動（パフォーマンス）の中に示す内的変容といった生徒の「質」に寄り添うことがこれから必要とされるだろう。小生自身、選手の「質」に迫ることの必要性と難しさを頭に入れた上でこれからの研究を進めていきたい。

気がつくとも外の景色が薄暮に変わり、時計の針はプレセミナーの終わりの時刻を告げていた。充実した時間を提供してくださった岡澤先生、また本セミナーを企画くださった諸先生方に厚く御礼申し上げます。

演者報告

教員養成大学における「体育心理学」の講義をめぐって

杉原 隆 (十文字学園女子大学)

上記のテーマでキーノートレクチャーをするよう依頼を受けた。長年にわたり教員養成大学で「体育心理学」の講義担当してきた者として、自分なりの考えを紹介し、参考にしていただければと思いお引き受けした。授業を最初担当したころは、心理学的な知見を学生が自分の経験に照らして理解できるよう具体的な例を挙げて解説することを心掛けた。しかし、体育心理学に含まれる多くの領域を総花的に取り上げたのでは、領域個別的な知識の脈絡のない提供に終わってしまい、実践に結びつく専門的知識として学生の身に付きにくい。そこで、講義内容全体に一貫した筋を通して体系的な知識を提供し、実践に結びつく体育心理学にしたいと考えた。そのためには、体育心理学の中核をしっかり押さえることが必要になる。

体育の存在基盤、教科としての独自性は運動学習にあるとよいだろう。なぜなら、体育から運動の学習活動を取り去ったら体育という教科は成立しないし、学校体育の目的はすべて、運動の学習活動を通して達成されるからである。体育の目標については、健康・体力や人格形成など運動を手段と位置づける立場と、運動に対する志向性とプレイする能力の育成という運動文化・目的論的立場がある。心理学的には後者の志向性は運動に対する動機づけであり、プレイする能力は運動学習によって獲得される運動技能である。運動学習と動機づけは同じ心理学でも互いにほとんど関係のない研究領域として発展してきた。しかし、その研究成果をよく吟味してみるとお互いの間の密接な関係が浮かびあがってくる。学習の前提基盤となる

のは動機づけであるが、なかでも内発的動機づけに基づいて効果的に運動学習がなされると、動機づけの強化機能が働き内発的動機づけが高まるという循環関係である。E. L. Deciによれば、内発的動機づけとは報酬が従事する行動に内在している動機づけであり、その内在する報酬とは自己決定と有能さの認知であるとされている。個々の運動の遂行にはその運動に特有の自己決定と有能さ、すなわち自分がどのように運動するかを決めて実行する能力が求められる。一方、運動学習研究からは、学習によって習得される運動技能が個々の運動に特殊性の高い能力であることが明らかにされている。このことは内発的動機づけが運動学習による運動技能の向上の追及であることを明確に示している。

さらに最近では、内発的動機づけ⇔運動学習という循環関係が有能感と無力感をとおして自己概念の形成に影響することも明らかにされている。すなわち、内発的動機づけ⇔運動学習という循環関係がうまく成立すると肯定的な自己概念が形成され、運動好きになるとともに、積極性や情緒安定性や高い幸福感につながる。一方、この関係が形成されないと運動嫌いになり、消極性や抑うつ傾向や反社会的傾向が生じやすくなる。

以上のような動機づけ、運動学習、人格形成に関する相互に関連づけられた体系的な知識が「体育心理学」の講義内容の中核となるというのが筆者の考えである。紙面の関係で詳しい説明ができなかったが、詳細は拙著「運動指導の心理学」(大修館書店2003)を参考にしてほしい。

私は、日本体育学会大59回大会で、杉原隆先生のキーノートレクチャーを拝聴する機会をいただきました。タイトルは、『教員養成系大学における「体育心理学」の講義をめぐって』でした。

杉原先生は、『学校体育の目的は、運動の学習活動を通して達成されるのであり、運動の学習活動なしでは、体育は成立し得ない。したがって、体育心理学の中核は運動学習である』と述べられました。さらに、体育心理学は、体育の目標として動機づけを促し、運動学習を促進させるのであり、運動学習の前提基盤となるのは動機づけであることや児童生徒の運動に対する動機づけを高めようとする事は、体育の最も重要な目的であることを指摘されました。そして、運動学習によって充足される動機づけは、人格形成とも密接に関係しており、運動学習、動機づけ、人格形成に関する知識を相互に関連づけ、一貫した体系の下に体育心理学の講義を行うのがよいと話されました。

杉原先生のキーノートレクチャーを伺っているうちに、まるで30年前にフラッシュバックしたかのような錯覚に陥りました。今から思えば大学生の時にもっとしっかりと先生のお話をお聞きしていれば、もう少し体育心理学を理解できたのかもしれないと、深く反省しているところです。

動機づけを高める心理学的な原則には、動機を満足させた行動ほど再現度が高まる

という強化機能があること。そして、この機能を使って、運動学習を促進させることが可能であることなど、とても勉強になりました。なにかに没頭するほど、そのものに心を動かされたとき、はじめて運動技能の習得への欲求が満たされ、着実に技能が向上するのだと思います。心と身体が、まったくばらばらに作用しているのではなく、相互に関係しながら心身の動きをスムーズなものにしていることが、重要な点であることがわかりました。

さらに、物事を実行するときには、必ず、何をするのか、そしてどのような行動を起こすかを決定しておかなければなりません。それも他者決定ではなく自己決定であることが、重要であることがわかりました。自分の有能さを感じるということがとても大切なことであり、内発的動機づけが運動技能の向上につながることにあります。

運動学習と動機づけとの関係を理解することが、体育実技の授業にとってとても大切なことであることが、いっそう強く心に残りました。キーノートレクチャーで取り上げていただいた、『教員養成系大学における「体育心理学」の講義をめぐって』というテーマは、多くの教師が体育実技を指導する中で、切っても切れない関係にある体育心理学の知識を十分理解することが必要であり、実践の中でその理論を指導場面に活かすことが大切な指導者の役割であることを痛感させられました。

土屋 裕睦 (大阪体育大学)

教員志望の学生に「体育心理学」をどのように講義すればよいか。最近の「体育学研究」では、運動部活動のストレス、内発的動機づけ、ライフスキル、オノマトペ、パーソナリティ発達・・・など、体育心理学のトピックスの多さは際立っている。いずれも、教員志望の学生たちには知っておいてほしい内容である。

しかしこれらのトピックスの理論的背景はさまざまであり、それを十分に解説し得ない状況でトピックスを羅列しても、総花的な講義に終わってしまう。この点について、教員養成系大学において四半世紀にわたって「体育心理学」を講義してこられた杉原隆先生はどのようになさってこられたのか。この点をお聞きするのが今回のレクチャーの最も大きな関心であった。

言い換えれば体育教師が知っておくべき心理学的知識とは何か、という問いになろう。当日は119名の参加があり、このテーマが体育心理学分科会会員に限らず、広く関心のあるテーマであったことが伺われた。参加した現職教師からは、「体育授業における内発的動機づけの重要性が改めて認識できた」とのような感想があった。

さて、レクチャーの概要について少し触れておきたい。まず、体育心理学の中核は「運動学習」であり、その前提基盤となるのは「動機づけ」であるとされた。そして

「運動学習によって充足される動機づけは、体育の重要な目的である人格形成とも密接に関係している」ことから、運動学習、動機づけ、人格形成に関する知識を相互に関連づけて体育心理学の講義を行うのがよいと解説された。

こうすることで「全体に一貫した筋を通して体系的な知識を提供し、実践に結びつく」ことが可能になる。なるほど、体育教師が知っておくべき心理学的知識の柱が定まった感じがした。

なお、以上のような意図のもとに刊行されたテキストが「運動指導の心理学」(大修館書店)である。この11月に新版として改訂され、具体例がさらに加筆されて読み応えが増しているので一読をお薦めしたい。最後に、先生のご経歴の一部をご紹介します。改めて先生の貢献の大きさを感じずにはられない。

<杉原隆先生のご経歴>

東京教育大学大学院体育学研究科修士課程修了後、東京教育大学、筑波大学、東京学芸大学に勤務。現在は、十文字学園女子大学特任教授。社団法人日本体育学会副会長、日本スポーツ心理学会理事長・会長。文部科学省中央教育審議会専門委員、日本学術会議連携会員を歴任。財団法人田中教育研究所所長。

演者報告

「応用実践科学におけるフィールドの持つ意味—運動学習研究より—」

山本 裕二 (名古屋大学)

学会大会委員会の中込先生からこの題目でのお話をいただいてから、なかなか話す内容の構想が固まらなかった。私自身のこれまでの歩みの中でのフィールドとのかかわりを紹介すればよいと当初考えていたが、退官後の記念講演ではないので、私の思い入れだけを皆さんにお話しするわけにはいかないと思った。

そこで、この機会は今一度自身の歩みを謙虚に振り返りつつも、今後に向けていかにフィールドと向き合っていくのかを再考する場にして、その場を聞きに来てくださる方と共有すればよいと考え準備した。

しかしながら、岡澤先生のプレセミナーに参加して、圧倒的なエネルギーにまずは驚嘆した。真摯に教育現場と向き合いつつも、様々な工夫を凝らしながら実践研究としての成立を模索し、さらに再度教育現場への還元を行うその見事なまでの円環性とそれを動かし続ける力に圧倒された。運動学習研究が現場でより必要だという表面的なメッセージ以上に、その現象へ向き合う姿勢に共感を覚えた。

次に杉原先生のキーノートをお聞きし、俯瞰的に現象をとらえることの重要性を再認識し、それを行ってこられた先生の聡明さに感動すら覚えた。今ではあたかも異なる研究領域としてみられる運動学習と動機づけという2つの領域をつなぐことこそが現象を適確にとらえ、体育心理学という応用実践科学の存在基盤になるものと確信した。

さらに、シンポジウムで扱われた個人差の問題は私の発表の中でも触れたが、まさに応

用実践科学として原点となるべき問題であった。方法論としての質的研究の話題も出たが、大切なのは方法論ではなく現象をいかに真摯に受け止めるか、換言すれば真の理解を求めると痛感した。

自身の話題提供と離れて今回の企画の感想に紙面を費やしてきたが、これらの内容はまさに今回の私自身の内容そのものであった。科学としての存在基盤として要素還元という名の下での現象の切断。それに警鐘を鳴らしておられたのが杉原先生のテーマであり、岡澤先生の教育現場との格闘であった。運動学習研究と言いながら現象を切断し、要素を自在に操作した実験研究はあくまで観念的なモデルの世界の中でのことであって、現象の縮約ではない。現象の真の理解のために(観念的)モデルも必要となるが、モデルは現実世界とは異なる次元であることを忘れてはならない。

また、現実世界に存在する多様性や複雑さ、換言すれば個人差にとらわれるだけでは表面的な記述に終わってしまい、これもまた現象の真の理解には届かない。個に寄り添って共感しつつ観察することの重要性はいうまでもないが、それだけではいわゆる対処療法で終わる。方法論という定規は一つではなく、眼前の現象に適確に浮かび上がらせるようにいくつも用意しなければならず、そのために研究者は日々研鑽しなければならないのだと自戒した。登壇させていただいたことに感謝するとともに、ご清聴ありがとうございました。「永遠の青年」であり続けたいと思いました。

早川 琢也（東海大学大学院体育学研究科）

キーノートレクチャーを傍聴させて頂き、私自身改めて考えさせられるような新しい視点が得られることが出来ました。まず、杉原先生より『教員養成系大学における「体育心理学」の講義をめぐって』という題名で、奥深い内容のお話をお聞きました。私自身、体育心理学という言葉の解釈は大変困難であると感じており、まだ自分の言葉でうまく説明することは出来ていないのが現状です。その最たる理由は、「体育心理学」と「スポーツ心理学」の2つの領域が似ている部分が多く解釈が容易ではないということが考えられました。特に、体育とスポーツの概念が混同しやすく、この区別をつけられないと「体育心理学」と「スポーツ心理学」の理解は進みにくいと思います。そう感じていた私にとって、今回の講演は「体育心理学」の理解を促す内容でした。

また、山本先生からの「応用実践科学におけるフィールドの持つ意味ー運動学習研究よりー」という題目の講演では、多くの勉強になる知識を得ることが出来ました。フィールド研究を進めていく上で避けては通れない課題の一つに、実験条件の統制をどこまでこだわるかが挙げられると考えられます。実験条件を統制しなければ、実験の精度が下がり適切なデータが得られない。一方で、実験条件を細かく統制していくと、

フィールドで行っていないながら実験室的な研究になってしまう。この点は、私が研究を進めていく上での葛藤でありました。私の研究はスポーツメンタルトレーニングにおける介入研究を主としており、それらの研究はフィールドで行うものであって、この講演を聞かせて頂いた頃は、実験条件の統制を含めたフィールド研究の難しさを痛感していた時期でありました。それだけに、この講演を通してフィールド研究に対する考え方や基本的な知識を学ぶことが出来たことは、自分の研究を進めていく上で大きなプラスとなりました。特に、研究を行うには理論の検証が重要であり、運動現象に関する理論を立て、実践の場でそれを検証することが必要であるという考え方は、今後の自分の研究を発展させていくにあたり大切なことであると感じました。体育・スポーツ分野の数々の理論に限らず、あらゆる分野の理論は不変のものではなく、新たな発見や地道な検証によって変化してきました。このことは、現存の理論はまだ検証や発展の余地があると言え、理論の提起とその実験的検証を繰り返していくことで、運動・スポーツ・体育実践の場に関する理解や説明が進み、心理学が運動・スポーツ・体育領域に貢献できる可能性が大いにあると感じました。

荒木 雅信 (大阪体育大学)

2008年9月9日から12日まで、早稲田大学において日本体育学会第59回大会が行なわれた。体育心理学専門分科会では、企画委員会(委員長;中込四郎先生)を中心にスポーツ・体育における「個人差・パーソナリティ」に関連する諸要因を取り上げてシンポジウム・キーノートレクチャー1・2を構成した。

「個人差(パーソナリティ)」を扱った研究は、1960年代頃、体育心理学領域の中心課題であり、学会大会での研究発表の主要な部分を占めていた。その後、運動学習領域、動機づけや集団行動を中心とした社会心理学領域に研究の中心が移り、さらに実践的・現場的な研究領域の代名詞となった「心理的サポート」と呼ばれるメンタルトレーニングの実践研究が主流になった感がある。

企画委員会は、シンポジウムでは「個人差(パーソナリティ)」に関わる課題について、キーノートレクチャー1では、主として教育現場における「個人」の問題を、そしてキーノートレクチャー2ではスポーツ・体育のフィールドでの「個人」の問題について、運動を通じた「体験」に注目して各講師が膨大な研究資料を基に、明確にその方向性を示した。企画委員会の目論みは見事に具現化されたといつてよい。

キーノートレクチャー2では、「応用実践科学におけるフィールドの持つ意味 - 運動学習研究 -」と題して山本裕二先生(名古屋大学)に、自身の運動指導の経験で得た指導者としての「立ち位置のゆらぎ」を指導例から示され、ひとつの確信を持つに到る過程を判りやすく解説して頂いた。講演では、「個人差」の問題から出発し、多くの指導現場(フィールド)での問題を理解

するための「解」を見出す指導法・運動学習・運動制御の各領域の有効な理論と研究方法を紹介し、それらを基にした検証法を具体的に解説されて、一定の理解が得られたことは有意義であった。また、それだけでは十分な「解」を得られないこと、フィールドの問題を再度、理論の側に戻し検証し、再々度、フィールドに戻し実証するという研究の相互循環のプロセスを示した。このような研究に対する姿勢(哲学)を、われわれは大いに見習うべきである。

先にも話したが、今日の体育心理学研究の方向性は「現場的・実践的」志向が大勢であるように思える。今学会の一連の企画は、それに警鐘を鳴らすものである。決して、「現場」や「実践」を軽視することではなく、フィールドを見据えつつ、基礎的な検証を行なうことが大切であると言いたい。特に、若手研究者は基礎研究の経験を多く積んで貰いたいものである。また、「個人」を扱う研究、特に「パーソナリティ」に関連する要因はスポーツ・体育心理学の根幹を形成するひとつである。この分野での基礎研究(理論的検証)の報告が、体育学会で多くされることの重要性を演者の発表から痛感した。

最後に、演者が講演のなかで何度の引用されていた中村氏(1992)の「実践とは、各人が身を以てする決断と選択を通して、隠された現実の諸相をひきだすことなのである。そのことによって、理論が現実からの挑戦を受け鍛えられ、飛躍するのである。実践が理論の源泉であるというのは、その意味で考えられるべきなのである」という文章を、秋の夜長によく味わってみたいと思う。

中込 四郎(筑波大学大学院人間総合科学研究科)

平成 20 年度の日本体育学会大会・体育心理学専門分科会シンポジウムでは、特定の研究課題あるいは領域からご関係の深い先生方より話題提供いただくのではなく、「個人差」をテーマとして取り上げることによって、研究対象や課題の理解あるいは関わり方について考える機会となることを願って企画いたしました。

私は、「個人差」(個体間・個体内差)への配慮・注目が、心理学の出発点にあるのではないかと受けとめています。また、私たちが、研究課題をもつに至る過程の始まりは、身の回りの個別事象への注目ではないかとも考えています。その後、多数の標本による確かめへと移行していくにしても、出発点となった「個の理解」が十分でなければ、説得力ある定量的研究の実現は困難となるはずです。

しかしながら、客観性や普遍性を強く志向する今日の傾向は、直接個人差を扱うことを少なくし、その代わり、収集した多数のデータに精緻な推測統計(有意差検定)を施し、間接的に個人差を扱うようになってきたように考えられます。必然的に、個に対する見方の変化、そして個人差要因を直接組み込んだ研究計画が少なくなったように感じられます。

今回の「個人差」を取り上げた背景として、私の中には、「今は注目されていないが、再び考えることは何らかの意義があるはず」といったテーマを扱ってみたいとの漠然とした思いもありました。そのようなことから、個人差変数・要因と関連の深い領域として、パーソナリティがすぐに浮上してきました。体育心理学の中でパーソナリティ研究も激減したととらえています。伝統的なテーマとも言える、「スポーツとパーソナリティ形成」においても、個人差の視点を強く意識して

いれば自ずと対象者らの体験内容に迫ることになるかと思えます。パーソナリティ研究と個人差変数を扱った研究が下火となった背景はどこかで繋がっているように思われます。さらに、現場から遊離した研究との批判には、個別事象への関わりが薄くなったことも一部起因しているのではないかとの見方をしています。

このような企画主旨に基づき、本シンポジウムでは鈴木 聡先生(東京学芸大学附属世田谷小学校)、竹之内隆志先生(名古屋大学総合保健体育科学センター)、荒井弘和先生(大阪人間科学大学人間科学部)より話題提供をいただきました。3名のシンポジストの先生からは、小学校体育指導の現場、パーソナリティ変容研究、そして個別事象を扱った研究アプローチと、それぞれが精力的に取り組んでいる研究・実践の場から、フロアーとその後の討議を導く有意な視点を提示いただきました。

当日の討議の流れとして、「個人差」を扱うことが、すなわち事例研究であり、質的研究であるといった受け止めを一部でされたようであるなら、司会者である私の不手際と、お詫びいたします。両アプローチを採用している研究であっても、このシンポジウムでテーマとした「個人差」を十分汲んでいないものも散見いたします。

企画者も含め、話題を提供したわれわれ4名は、「個人差」を強く意識してこれまで関わってきたわけではありません。今回の課題を設定した時点から(あるいは依頼を受け)、自身のこれまでの研究・実践を振り返ったのが正直なところです。われわれとしては今回のシンポジウムによって、参加された会員の皆さんが、しばし立ち止まってご自身の研究・実践を「個人差」の視点から見つめ直す機会となれたならば幸いです。

演者報告

鈴木 聡 (東京学芸大学付属世田谷小学校)

体育心理学専門分科会のシンポジストに選んで頂き、本当にありがとうございます。体育科教育を専門としている私にとりまして、大変分不相応な大役と認識しており、せっかくのシンポジウムを台無しにしてしまうのではないかと危惧しておりました。僭越ながら、小学校の体育科授業場面における個人差の扱いやそこから解釈される事象、そして個人差を生かした授業づくりについて紹介させて頂きました。素晴らしい先生方そして参会者の皆様方のおかげで私自身大変勉強になる機会となりました。

学校教育における体育科授業の場において、「個人差」という現状は大きな問題関心です。私たちが日常行っている児童理解そのものが、個人差の理解であるという視点で、論を進めさせて頂きました。個を形成している要因は、パーソナリティは勿論、生活環境や家庭環境、友だち関係や学習意欲、体育科の学習場面では身体能力や自尊心、運動経験、技能…実にたくさんあり、学校現場はこれを同時に扱っていく非常に難しい世界だという見方もできると考えます。そもそも、個人差に応じた支援を日常的に行うことが、私たち教師の仕事の本質なのかもしれません。それが、ディスカッションを通して再認識できました。

私たち教師は、丁寧な個のみとりを大事にしていく必要性を常に求められますし、意識しております。以前は、一斉学習とい

う形態で進む授業であっても、一人ひとりの個を生かしていこうと考えておりました。しかし、ただ個を生かすのではなく、個をつくるたくさんの要因や変数が存在していることを理解し、その一人ひとりが学びの場を形成していることをふまえ、全体としての授業だけでなく、個の学びに何が起きているのかを丁寧にみていくことがより大切であると最近強く思います。「若い頃は、全員を上手にしたりできるようにさせていくことに情熱を傾けていたが、現在は、子どもたちの学びの過程を丁寧に見ていくことを大事にしている」という私の発言に対し、フロアの方から、教師として、その経験があったからこそ、今のような考え方に至っているのではないか、というご意見をいただきました。若い頃のいわゆるパワー主義で授業をしていた頃に受け持っていた子どもたちに悪いことをしたように考えていましたが、このご意見によって救われた気にもなります。個別の事象に丁寧に目線が向くようになるには、確かに教師としての経験と授業の積み重ねが必要なのかもしれません。

学校現場は、個人差変数の宝庫であり、授業研究や児童理解は、パーソナリティ研究の視座をもってこそ、成功裡に機能するのかもしれません。今回のシンポジウムを通して、図らずも自分自身の教師としての自己反省ができました。今後も精進して参りたいと思います。

今回のシンポジウムは、体育・スポーツ場面における個人差やパーソナリティ要因について考えることがテーマでしたが、私は主としてパーソナリティの方に焦点を当て、「スポーツ経験とパーソナリティ発達をめぐる研究の課題」と題して話題提供をさせていただきました。

話題提供では、まず 1983 年以降のスポーツ・パーソナリティ研究のレビュー結果を報告し、研究方法上の問題点を指摘しました。つまり、大学生に YG 性格検査を行いスポーツ実施の有無や種目の違いなどで比較するだけの研究が多いこと、また、こうした研究方法は 1960 年頃に行われていた方法と同じであり進歩がないこと、さらには、こうした研究方法ではスポーツがパーソナリティ発達に寄与する条件には迫れないこと、などを指摘しました。次に、こうした状況を打破するために、スポーツ経験の質を詳細に捉えたり、パーソナリティ変容理論を導入することなどを提案しました。また、スポーツ経験もパーソナリティも加齢に伴いながらそれらの質が変容していくので、両者の関連については生涯発達の観点から捉え、幼少期からの発達段階ごとに両者の関連を調べる必要性も指摘しました。その後、スポーツ経験とパーソナリティ発達の関連を生涯発達の観点から捉えたモデルを提示し、モデルの一部を検討した私の研究を紹介しました。最後に、スポーツ経験とパーソナリティ発達研究の課題として、各自のスポーツ経験の違い（個人差）を追求することや、「どの時期」の「どのようなスポーツ経験」が、「どのようなパーソナリティ」に「なぜ」影響するのかを

包括的に理解することを提案しました。また、パーソナリティ発達に影響する経験はたくさんある中で、あえてスポーツ経験に着目する意味やスポーツ固有の影響を明らかにすることも課題として指摘しました。

このような話題提供でしたが、最も悩んだ点はスポーツ経験とパーソナリティ発達の話の中で、個人差についてどのような話題提供ができるかという点でした。これまで個人差についてはさほど考慮せずに研究を行ってきたので悩んだのですが、この点を考えるために、これまでに発表した論文や過去に入手したデータを個人差という観点から見直す作業を行いました。その結果感じたことは、個人差を考慮することで研究がより深まるのではないかということでした。例えば、従来のパーソナリティ研究では、スポーツ経験の多い人の方が少ない人より外向的と結論づけられることが多いのですが、スポーツ経験が多い人でも内向的な人はもちろん存在し、個人差があるはずです。しかし、このような個人差を追求した研究は見当たりません。そこで、このような個人差が生じるのはなぜかという視点を持ち検討することで確実に研究が進展すると思い、シンポジウムでも同じ主旨のことを述べさせていただきました。

以上のように、今回シンポジストとして話題提供をさせていただきましたが、自分の研究を振り返ったり、個人差について考える良い機会となりました。最後になりますが、このような機会を与えてくださいました専門分科会学会大会委員会の先生方、ならびにご清聴いただきましたフロアの皆様にお礼申し上げます。

演者報告

個人差を大切にしたい研究の実践：現場で得たデータを実践に活用する

荒井 弘和（大阪人間科学大学人間科学部）

「個人差は大切にされるべきである」という意見に、異論を差し挟む者はいないであろう。実践においては、個人差を無視することはできないためである。研究についての、「個人差を重視するべきである」または「重視するべきでない」という議論も不毛であり、どちらの立場で行われた研究も実践に貢献できるはずである。おそらく、個人差を積極的に扱わない研究が目指すべきなのは、多様な現場において実践の拠り所となる「指針」を示すことであり、個人差を積極的に扱う研究が目指すべきなのは、具体的で生き生きとした「事例」を示すことなのであろう。

本シンポジウムでプレゼンテーションを行うにあたり、個人差に着目する前に、まずは個人を大切にすることが必要なのではないかという提案を行った後、「1. 個人を大切にしたい研究・実践の紹介」「2. 個人を大切にできる研究手法」「3. 個人を扱うことに関する提案」という3つからなるアジェンダを設定した。

1. 個人を大切にしたい研究・実践の紹介

具体例として、事例研究である荒井（2008：大学体育学）および質的研究法を用いた荒井ほか（2005：スポーツ心理学研究）を紹介した。

2. 個人を大切にできる研究手法

個人の問題を扱うのか（個体差重視）、共通する問題を扱うのか（個体差相殺）、つまり研究の目的によって、研究方法は選択されるべきである。個人を大切にできる研究法として、一事例の実験デザインと質的研究法を挙げた。一事例実験デザインについては、現在では、視覚的判

断を凌駕するほどの検定がないという知見を紹介した。質的研究法については、曖昧な部分を扱うことに醍醐味があるとも考えられるので、安易に切り捨てないようにするべきではないかということ述べた。

3. 個人を扱うことに関する提案

個人を大切にしたい研究が実施されていない理由（障壁）として、「研究に仕立てにくいと思われやすい」「適切な研究方法があることを知らない」「代替案だと思われやすい」ことがあるのではないかという私見を述べた。最後に、胸を張って個人の研究を行うことを目指して、「個人（個別事例）を大切にしよう」「現場で得られたデータを元に、介入を行おう」「積極的に研究発表をしよう」ということを述べ、「現場はすべて個別事例である」ことを強調し、プレゼンテーションを終了した。

ディスカッションでは、「指針と事例は平行線か（名古屋大学の山本先生）」「良い質的研究をできるようになるための方法について（国立スポーツ科学センターの武田先生）」「良い質的研究は、書いた人の目になって読める／きちんとした質的研究をやっぺいこうという呼びかけ（びわこ成蹊スポーツ大学の豊田先生）」など、貴重なコメントをいただいた。本シンポジウムが、体育心理学研究において、個人を扱うことに関する議論を導くためのステップになればと考えている。

謝辞：企画者・司会の中込先生、シンポジストの鈴木先生、竹之内先生、事務局としてご尽力くださった早稲田大学の皆様へ感謝申し上げます。

体育心理学が個人差への配慮・注目から始まった学問でありながら、近年、個人差やパーソナリティ要因に関する研究が少なくなってきたとの現状認識から、減少傾向にある個人差やパーソナリティ研究を再考し今後の研究課題探しに繋がりたいと、司会の中込氏からシンポジウムの趣旨説明があった。

最初に登壇されたのは、現職の小学校教員でもある鈴木先生である。体育心理学が現場から遊離した研究が多いという批判がある中、学問の成果が教育現場でどのように活かされるのか大いに期待される。個人差の捉えと授業作りがテーマで、授業風景のビデオ動画を交えた明快な発表であった。器械運動領域の授業では、一人ひとりの個性を大切にすることは個人の得意技やこだわりを大切にすることであり、個人を集団活動の中でしっかりと見取ることが重要だと述べられた。技を教えることだけでなく、授業の中で子どもたちがどう関わっているかを解釈する能力が教師に求められるという指摘であった。

第二番目の発表者は竹之内先生である。氏は国内外の体育心理学の文献のメタ分析から、従来のスポーツとパーソナリティ研究の問題点を指摘して、将来の研究のあり方に対する提言を行うものであった。スポーツが個人に対して有用なパーソナリティ特性をもたらす為には個人がどのようなスポーツ経験をしたのか、そして、どのような行動変容を得たのかという観点が重要である。スポーツ場面で選手が、考え、探求し、危機を乗り越え、再び自己投入するという、個人の体験レベルの組み立てから個

人差・パーソナリティ特性が生まれる。こうした自我発達の枠組みを考える研究の重要性を指摘された。

第三番目は荒井先生である。冒頭に、統計を使った研究は評価されるが、個人を直接扱う質的研究は評価されることが少ないと指摘して、個人差の研究事例、個人差の研究手法、観察記録と介入について述べられた。従来の量的研究は指針があって第三者的な評価が得られるが、個人差を扱う質的研究は事例を扱い、根拠の水準が違うのでいつまでも平行線となると発表された。

各演者が与えられた時間を遵守された結果、比較的長時間の活発な質疑応答が持たれた。授業分析では教師の観察眼が大切だが、教師自身の成長が関係すること、重要な他者の眼、広い眼の必要性、親和的な学級経営の重要性が語られた。メタ分析では、従来のパーソナリティ研究が全く不毛であったとはいえないとの指摘や、従属変数と独立変数を設定し仮説検証的研究を行っても縦断的研究こそ重要で、実は息の長い研究の難しさが本題となるとの主張もあった。また長年、質的研究法を続けている先生方からは、質的研究は個の正しい理解が難しいという指摘があり、研究者側の見る眼、すなわち視点の深みが研究水準に反映するのだと研究上の厳しさが示唆された。

自我発達の段階説を提唱した Loevinger は Character と Ego を区別しなかったという。内田クレペリン精神検査を使う古いパーソナリティ研究者としては、最初に若干の Personality 定義が欲しいところであった。

早稲田大学において行われた第 59 回日本体育学会における体育心理専門分科会シンポジウム、「体育・スポーツ場面における個人差・パーソナリティ要因に関わる研究の課題」を傍聴した。冒頭に中込先生から本シンポジウムの趣旨の説明があった。「個の理解が集団への理解の出発点」と先生はおっしゃられた。研究者的な観点からみて、特に自然科学系の実験計画において必要とされる限り個性を消し、条件統制によって個人差を極力少なくしようとする努力に対して、すなわちそのことが個の理解への関心が低下することと同義ではないということの警鐘でもあるように感じた。

シンポジストは授業実践の立場から東京学芸大学附属世田谷小学校の鈴木聡先生、研究者の立場から名古屋大の竹之内先生、大阪人間科学大学の荒井先生の 3 名であった。

鈴木先生からは小学校の指導現場から、対象の「個」に迫ることの必要性を具体的な事例を通して分かりやすくご発表をいただいた。先生のようなご発表を目の当たりにすると、やはり個人差や、その個人が持つ文脈の重要性を痛感させられる。竹之内先生からは先生が行ってきた研究活動から、パーソナリティ発達にスポーツ経験がどのように影響を及ぼすのかについての概略が述べられ、その際に扱われる変数をどのように規定するかについてご発表をいただいた。鈴木先生のご発表から竹之内先生の発表を通じて、「個人差」の中の「パーソナリティ」や「個性」というよりはその人の生きてきた「人生の文脈」といったものの重要性がさらに強調されたように感じる。荒井先生

からは「個人差」を重視した研究事例からどのような方法論で個人差を積極的に扱うことができるのかについて提言をいただいた。荒井先生は研究を実践とつなぐことに非常に積極的で、実践活動も活発に推進しておられる。「個」や「質」という従来の自然科学的手法では扱えなかった変数をどのように扱うかについての「新しい挑戦」を話題として提供していただいた。

フロアを交えてのディスカッションでは、それぞれの捉える「個人差」というものに対して活発な意見の交換が行われた。一方で「個人差」を捉えるという本シンポジウムのテーマから少し「事例研究」というところに議論が向いていたようなところも見られたが、中込先生の適切な進行のおかげで大きく逸脱することはなかったように感じる。いずれにせよ、中込先生のおっしゃるように、「心理学」というものが「個人差」をスタートとして成立しているということには、異議を唱える人は少なかったのではないか。しかしそうした方法論が一般化や普遍化を目指す「自然科学」的な手法にのせようとしたときに、多くの人が疑問に感じながらも個人差を無視せざるを得なかった時代の影響を受けてきたことを改めて考えさせられた。個人差を極力排除した方法論で科学が述べられていた時代は、終焉した、とまでは思わないが、それですべてを語る時代はもはや過ぎ去ったようにも感じる。私自身も実践活動を新しい方法論で研究活動につなげていくことの必要性を痛感させられ、大変刺激的なシンポジウムであった。この場を借りて、中込先生と 3 名のシンポジストの先生方に感謝を申し上げたいと思う。

○ポジティブ特性へのスポーツドラマチック体験の規定力 (橋本公雄:九州大学健康科学センター、徳永高司:西日本鉄道)

演者らが取り組んでいる「スポーツ選手のドラマチック体験が生きる力に及ぼす影響について」の一連の研究発表であったが、今回は「スポーツドラマチック体験尺度」や「スポーツ版強み・長所尺度」を用いてのポジティブ特性へのスポーツドラマチック体験の規定力を検討されたものである。技術の向上を図る過程におこるドラマチック体験があらゆるポジティブ特性に関連していると示唆されたことは興味深い。一方、努力や練習の重要性の気づきや対人トラブルによる自己反省が特異なポジティブ特性に関連しているとのことであったが、スポーツでの体験が、一瞬のうちに、あるいは時の流れのなかで熟成し、ポジティブ特性の限られた枠内で語るこのできない生きる力として生成されることもあると考えられ、また、スポーツのドラマチック体験は、台本があっても、常に繰り返される再演 (日々の練習や試合など) や状況の変化によって書き直され、語り直されると思われる。

スポーツドラマチック体験が、私たちの人生においてけっして特殊な出来事ではなく、生き生きと私たちの心的現実として寄り添っていることを感じると同時に「規定力」という言葉で枠組み作りをすることの難しさを感じた。

○大学生を対象とした運動不振尺度の開発 - 妥当性と信頼性の検討 - (古田 久:埼玉大学)

運動不振尺度を開発するために59項目の質問を因子分析などの統計的手法を用いての分析であった。

フロアからの質問もあったように、因子分析などの統計的手法を用いるとき、厳密であろうとすればするほど、その統計的処理方法に惑わされることも多く、演者の意図性や操作性が入ることに十分配慮すべきであると思われた。また、大学生を対象とした「運動不振」という着目は、さまざまな大学体育における指導・教育が抱える現実的な問題を想起させるものであり、実践的な教育的配慮も含め、今後より厳密で幅広い視野での展開が尺度の開発とともに必要であると考えさせられた。

○高校運動部員に対するストレスマネジメントプログラムの実施とその評価 (渋谷崇行:県立新潟女子短大、西田 保:名古屋大学、佐々木万丈:仙台電波高専)

高校運動部員 (男子11名、女子3名:一年生) を対象に、ストレスマネジメントプログラム(SMP)を作成し、4週間に渡り、4回のセッションを実施した効果を、ストレスサー尺度、認知的評価尺度、コーピング尺度、ストレス反応尺度、適応尺度などを用い実施前後の2回行い検討されたものである。また、最終セッションでのワーク

シートの記事内容の詳細な検討も付加されていた。

SMP 展開の効果をさまざまな尺度を使い、また、その尺度では捉えることのできない心理的効果をワークシートの記述での検討が必要であると感じた。また、対象が比較的少人数であったことも、きめこまやかな、状況の変化に対応する個々人への介入が促進されたのではないかと思われ、一方、SMP

の実施にあたり、「誰が、どのように」といった展開するのかといった基本的な問題も考えさせられた。つまり、誰でもが展開できるように作成された SPM であると思われるが、演者らのスポーツ心理臨床家としての個人的な生徒に対するあり方が、もっともその効果に影響を及ぼすものではないかと思われた。

山本 裕二 (名古屋大学)

今回のセッションは2題であったが、相互の関連は少なかったのでそれぞれ個別に報告する。

一題目は杉山先生(九州大学)による「小学校の体育授業を通してライフスキルを獲得・向上させる試み」であった。西田保先生(名古屋大学)を代表とする科研による共同研究の一環で、体育授業において獲得されていると仮定される心理社会的スキルを介入によって般化したライフスキルとなるか否かを検討したものであった。そのために通常の小学校での体育授業の授業後に般化を促す振り返りを子どもに行わせることによって、般化を図ろうとするものであった。結果は、こうした授業後の簡単な振り返りによっても、授業で獲得される心理社会的スキルが日常生活でのライフスキルとして般化することが示されるものであった。発表時間の関係から、介入を行った3つのクラスでの体育授業の内容については報告されなかったが、担当した教員の経験年数によっても影響を受けている可能性があるということからも、授業内容との関連において、心理社会的スキルが体育授業で獲得される要件などについてもお話しただきたかったというのが素朴な感想であった。

二題目は乾先生(鳴門教育大)による「手指の周期的な等尺性力発揮における力とタイミングの制御」であった。冒頭、プログラム並びに予稿集でのタイトル「手指の力の適応制御における遠心性コピーの役割」からの変更が告げられた。課題は人差指で力を入れることと抜くことの周期的な調節で、その際の力量の発揮量を操作して、目標発揮筋力とその発揮筋力の変動と時間的変動の関係を検討されたものであった。結果は、同じ目標発揮筋力であっても、それが力を入れるときの目標となるか力を抜くときの目標となるかによって発揮筋力および時間の変動が異なる、すなわち脱力目標となる場合により大きな変動を示すというものであった。ここで報告されたものは現象としては面白いと感じたが、なぜこうした現象が生じるのか、あるいは現実ではどういった場面に相当するのだろうかと考えさせられた。

朝一番のセッションにかかわらず、多くの人に参加していただいたことに感謝する。またそれだけに、いずれの発表においてももう少し発表時間が長い方が、研究の全体像や細部まで理解できると思われ、今後発表時間の延長を望むところである。

杉山 佳生 (九州大学)

大会最終日(12日)の午前の口頭発表で、2演題の座長を担当しましたので、個人的な感想を交えて、ご報告いたします。ただし、私にはあまり馴染みのない領域の研究報告でしたので、紹介内容やその解釈に誤解があるかもしれませんが、ご容赦いただければ幸いです。

一件目は、名古屋大学の山本裕二先生による「ソフトテニス・シングルスゲームにおけるダイナミクス-対人間協応の観点から-」という演題でのご発表でした。その内容は、ソフトテニスのゲーム中の選手の動きを、コート中心からの極座標(角度)によって表現することで、ゲーム展開を記述しようと試みるものでした。この方法では、クロスコートでのラリーが行われているときは、両選手の値がともに正あるいは負となり、ストレートでのラリーでは、正負が異なることとなります。テニスのシングルスでは、クロスコートで打ち合っているときは比較的ラリーが安定して進行する一方で、「仕掛ける」際には、ストレートコースへボールを打つことによって不安定状況を作る、などといったことが行われるようです。このような背景を鑑みれば、今回のような極座標による表現がゲーム展開の把握に有効な手段となるのではないかと、ということが演者の主張であると理解しました。

フロアからは、角度だけでなく中心点からの距離あるいは高さも考慮すべきではないか、あるいは、

周期的な運動では有効な考え方ではあるが、テニスではどうなのか、といった質問が出されました。確かに、まだ多くの課題が残されているという印象も持ちましたが、今後の発展が期待される独創的な提案であるとも感じました。

二件目は、京都大学の藤井進也先生による「世界最速ドラマーはどれくらいすばやく叩けるか?」という演題でのご発表でした。演題のとおり、「世界最速ドラマーコンテスト」で優勝したプロのドラマーの、スティックを使ったタッピング課題での速さなどを探るという内容でした。結果は、一般に限界と言われている毎秒5~7回を超え、毎秒10回の速さで叩くことができるというものでした。優れているのは速さだけでなく、安定性も保持されており、また、左右いずれの手においても、同様の速さを有しているとのことでした。特に、打叩間の屈曲筋活動の間隔が、ノンドラマーで60ms、一般ドラマーで50msであったのに対し、世界最速ドラマーでは10msであったという結果には、驚かされました。

フロアからは、片手で課題を実施している間のもう片方の手の筋活動はどうなっているのか、ゆっくりした速さでも安定性は保てるのか、スティックがなくても速さは維持できるのかなど、今後の研究の展開に結びつくような、多くの質問が出され、座長の責務を忘れて、議論に聞き入っておりました。

第 59 回日本体育学会は 9 月 9 日から 12 日までの 4 日間、早稲田大学で開催されました。体育心理学のポスター発表日である 10 日は秋晴れの過ごしやすい気候でしたが、会場はたくさんの人で賑わい、熱気で溢れかえっていました。

神戸大学で開催された昨年度の大会に参加した際も感じたのですが、今大会においても、大学院生の発表者が多く見受けられました。盛んに討論が行われているのもまた、大学院生によるポスター発表の前であり、1 時間という発表時間では不足、責任在席時間を過ぎても議論している光景が多数見られました。大学院生である私も、他の大学院生がどのような研究に取り組んでいるのか非常に興味があり、幾人かに質問をさせて頂きました。このような交流が刺激となり、お互いのモチベーションが高まり、より良い研究へとつながるのだと思います。また、発表者が思い思いの工夫を凝らしたポスターを見ることは非常に学ぶことが多く、今後の参考になりました。

私事ではありますが、日本体育学会で発表をさせて頂いたのは今回が初めてでした。発表をしてみて気付いたことは、他の領域の方々からもご指摘して頂けるという点です。昨年、専門領域の学会で発表した際は、同じ領域の方々からの鋭い指摘を頂きました。しかし、日本体育学会には 15 の専門分科会があるため、様々な視点からのご意見を頂ける機会があるのです。自分自身は

分かった気になっていたこと、気にも留めていなかったことなどが、他領域の先生方からの素朴な疑問からの質問で浮き彫りにされ、自明の理であったことに気付かされました。

今回ポスター発表させて頂いたテーマでの発表は、今大会が初めてでした。用いたデータ収集方法も分析方法も私にとって初めてのものであり、手探りのような感覚で進めていった研究であったため、ポスターを見て頂いた方々の目にどのように映るのか不安の気持ちで胸がいっぱいでした。伝わるだろうか、ご理解して頂けるだろうかと思いながらも、発表内容の説明をしていくうちに、忌憚のないご指摘・ご感想を頂け、今回の発表はたくさんのものであることができた貴重な経験となりました。

ポスター発表は、発表者がポスターの脇に立ち、参加者が質問をするという形式です。発表者と参加者がお互いの考えを持ち寄り自由に討論することができるのは、ポスター発表の最大の利点ではないでしょうか。今回の発表では、それを十分に活用することができ、非常に有意義な時間を過ごすことができました。

最後になりましたが、貴重なご意見を下さった方々に、この場をお借りしてお礼申し上げます。今回頂いたご指摘を参考に研究を進め、その後の展開をまた学会で発表できるよう努めたいと思います。

重藤 誠市郎 (東海大学)

早稲田大学で行われた日本体育学会第59回大会でポスター発表をさせていただきました。発表当日は初めての早稲田大学であるため、迷うといけないので発表時間の1時間以上前には高田馬場駅に到着しました。しかし、早く着きすぎたために発表をされる先生方の姿はまだなく、早稲田大学に向かう人の流れができていなかったため、案の定迷ってしまいました。そのため朝から40分以上のウォーキングをする羽目になってしまい、発表会場に着いた時には汗だくになっていました。

発表会場ではすでに多くのポスターが貼られており、大学院時の同期や後輩の姿もありました。今回の発表はスポーツ選手の自己愛傾向に着目をして、自己愛傾向の健康・不健康を他者意識との関連性によって調査をしたものでした。体育心理学でもあまり扱われていない自己愛に関する研究であるため、多くの先生方に興味を持っていただくことはできませんでした。しかし、興味を持っていただいた先生には一つ一つ丁寧に説明させていただきました。

また、本年度の大会には私の発表以外にも自己愛に関する発表がありました。発表の内容も非常に興味深く、議論を深めることができました。特に、これから調査をし

ていきたいと思っていた部分にも触れられており、今後研究を進めるにあたり良い刺激になりました。

発表会場は発表者と来場者の白熱した議論が盛んに行われており、発表者と来場者の意欲・関心の高さや研究に対する熱意や食欲な姿勢を感じることができました。このような先生方の姿に対して自分自身を振り返ってみると、あまりにも大きな差があると痛感しました。その姿を目に焼き付け、襟を正して今後の研究に取り組んでいきたいと強く感じました。また、他大学に進学した同期と再会し、環境の変化に戸惑いながらも常に前を向いて努力している姿に強い刺激を受けました。やはり、学会という場はいつも刺激にあふれ、自らの研究に取り組む姿勢を再確認することができ、次の研究への活力を得られる貴重な場だと感じました。

最後になりましたが、質問に対して丁寧にお答えいただいた先生方、私の発表に対して貴重なご意見を下さった方々、ご指導いただいた吉川先生、そして、ともに研究を進めてきた研究室の仲間から感謝いたします。次回の学会でより良い発表ができるよう真摯に研究に取り組んでいきたいと思えます。

金屋 佑一郎（読売巨人軍ジャイアンツアカデミー）

本年度の日本体育学会のポスター発表で感じたことを、『発表環境』『発表者の工夫』『今後への期待』という3点にまとめて述べたいと思います。

まず『発表環境』についてですが、今回のポスター発表は、会場が広々としていて、移動がしやすくポスターをゆっくりと拝見しやすい環境であったと思います。このポスター発表は、発表者と直接意見交換ができることが最大の利点であると思います。このことは、発表者にとっても、様々な分野から来られている先生方の意見を伺うことができ、討論者にとっても新しい研究や意見を知ることができ、とても貴重な時間になることは間違いありません。そのためにも、今回のような環境でポスター発表を行うことは非常にいいことだと考えます。

次に、『発表者の工夫』という点ですが、ある発表者の方が私に「ポスター発表というのは、まず見たときに興味を引くようなものでなければならない。文字が多いポスターは見にくい」とおっしゃいました。その言葉を聞いた時に、国際応用スポーツ心理学会（AASP）に参加した時のポスター発表の様子を思い出しました。AASPで発表されていたポスターは、1つ1つに個性があり、見ているだけで面白くなるような発表ばかりでした。なかなか英語がわからない私でも、絵や写真、グラフなどをあそこまで巧みに使われると、おもわず足を止めてポスターを眺めてしまうものです。つまり、まずポスターに興味を持ち、そこで発表者に声をかけ、そこから発表者と参加者との

ディスカッションが始まるのです。一方、日本の学会でのポスター発表は、視覚にうったえるというよりも、発表のタイトルや、発表者に興味を持って足を止める。そこでたくさんの文字を読み終わって初めて、発表者との意見交換が始まることのほうが多いような気がします。もちろん、この事がダメだと言っているわけではありません。ただ、先にも述べましたが私達のような若手研究者にとってみれば、様々な専門性を持った先生方から貴重な意見やアドバイスをいただけるのが、このポスター発表の最大の利点だと思います。その為にも、まずは興味を持っていただけるようなポスターを作る工夫も必要なことだと考えます。

最後に『今後への期待』についてですが、このこともAASPを思い出して感じる事です。AASPの発表の光景を見ていて非常に面白いことがあります。それは、様々な職業の方が参加されていることです。迷彩服を着た隊員の方や、現場で指導をしているコーチ、そして多くの研究者の方がいます。そのため参加者からの質問も幅広く、多くが現場での実践に直結しています。しかし、今回の学会も含め、日本の学会には現場のコーチの方々の参加がまだまだ少ないように感じます。最近の発表には、現場のコーチが聞いても興味を持っていただけるような内容が多くあると思います。素晴らしい研究を現場での実践に活かしてもらうためにも、現場のコーチにも学会に参加していただき、そこで研究者と実践者の意見交換ができるようになることを私は希望します。

大会参加記

豊田 則成 (びわこ成蹊スポーツ大学)

私は、9月9日のプレセミナーが始まる1時間ほど前に「早稲田の杜」に到着しました。数年前に日本スポーツ心理学会が開催された会場ということもあり、多少の土地勘はあったものの、都会の雑踏に押し流されはしないかと不安に思い、少し早めの到着を心に決めていました。案の定、地下鉄の早稲田駅から地上に上がった時には、少しだけ？道に迷ってしまいました。不覚でした。

まず、プレセミナーでは、岡澤先生から体育心理学の成果をどのようにして体育現場にフィードバックするのかを主軸とした長年に亘るお取り組みについてご講義をしていただきました。ここでは、現場と研究を融合することの難しさ、様々な角度からのアプローチの可能性、発展継承可能な課題への挑戦など、私自身、様々な刺激を頂戴しました。岡澤先生が「子どもたちは、(運動が)出来なくても認めてもらっている」とおっしゃったことが、とても印象的でした。また、体育教師の質的研究といった側面からのアプローチが有益であることにも首肯できました。刺激的な学びの幕開けでした。

翌日のポスター発表では、私が強い関心を有するキャリアトランジションをテーマとする研究発表もあり、非常に有意義な時間を過ごしました。キャリアトランジション問題は、アスリートキャリア形成とセカンドキャリア獲得の2側面からアプローチされ、今回の水野先生(順天堂大)や小川先生(近畿大学)のご発表は、前者の問題

と深く関わっているように感じました。フロアで立ち話をさせていただいた時には、私の問いかけに両先生から研究に対する熱い思いをお聞きすることもできました。

そして、中込先生が座長をおつとめいただきました「スポーツ場面における個人差・パーソナリティ要因に関わる研究の課題」のセッションでは、キーワードとしての個人差、この種の研究への関わり方、取り組み方への関心、個人差の扱い、注目が昨今激減してきていること等、私の研究意欲を掻き立てる内容が多くありました。話題提供者の先生方からは、それぞれのお立場から興味深いプレゼンテーションをしていただきました。一方、私も専心していません「質的研究」のトピックも取り上げられました。特に、竹之内先生(名古屋大)の「質的研究も量的研究も、どちらも大事」といったご指摘に深く賛同いたしました。また、個人的には、最近、荒井先生(人間科学大)とお近づきになれたこともあり、ご発表の中で沢山のことを学ばせていただきました。

常日頃より、私も個別事象へのアプローチに苦心しております。独善的な解釈とならないためにも、「個の正しい理解」が全てのベースとなることは意識しながら研究作業に取り組んではいるのですが、何をもって正しいとするのかは悩みの種だといえます。しかしながら、足取りを止めてしまっただけではないのだと、研究に対する意欲を触発されたように思います。実り多き体育学会でありました。

Ⅲ. 研究会の活動報告

スポーツ動機づけ研究会

磯貝 浩久（九州工業大学）

第6回スポーツ動機づけ研究会が平成20年5月24日（土）～25日（日）に名古屋大学豊田講堂で開催されました。

今回の研究会では新しい試みとして、トークセッションとシンポジウムが行われました。トークセッションでは、「トップアスリートが語る自らの競技に対する動機づけ方略とメンタルトレーニング」と題して、室伏由佳選手（アテネ五輪陸上出場）、中田有紀選手（アテネ五輪陸上出場）、林亭選手（バルセロナ五輪水泳出場）の3選手に、競技に対する動機づけとメンタルの実際について具体的に話してもらいました。一流選手の動機づけの方法を知ることができるなど興味深いセッションでした。特に、ライバルの存在がやる気の持続につながる、競技の継続には楽しさが不可欠であるという話が印象に残りました。

シンポジウムは、「体育やスポーツ活動で学んだことが、他の場面に般化するって、本当？」というテーマで行われました。体育やスポーツ活動を通して獲得した思考、態度、行動などの他の場面への般化の条件やプロセス、般化を促進する介入方法について、3名の演者（西田保：名古屋大学、杉山佳生：九州大学、渋谷崇行：新潟女子短期大学）により紹介されました。般化に関する研究は始まったばかりですが、体育・スポーツの意義を示す上でも重要な問

題であり、今後このような研究の進展が大切だと感じられました。

研究発表は以下の8演題でした。

- 1 体育における学習意欲に及ぼす動機づけ雰囲気の影響（磯貝浩久：九州工業大学）
- 2 自尊感情、身体的自己概念の変容に影響する要因（藪内豊：北星学園大学）
- 3 日中両国の高齢者における運動動機尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討（叶林：中京大学大学院）
- 4 スポーツチームにおける対人魅力過程の検討（河津慶太：九州大学大学院）
- 5 レジリエンス概念の紹介と競技スポーツ場面におけるレジリエンス構成要因（小林洋平：名古屋大学大学院）
- 6 スポーツ集団効力感尺度の開発（永尾雄一：国立スポーツ科学センター）
- 7 エキスパート・スポーツ選手の楽しみとは？（斉藤茂：松本大学）
- 8 おもしろい質的研究をやるためには？（北村勝朗：東北大学）

今年は参加者が34名と増えたため、会場が従来の円卓形式からフォーマルな場所になりましたが、例年通り活発な質疑が行われました。また、ほぼ全員が参加した繁華街栄での交流会でも、楽しく自由に意見交換されました。来年度も5月に名古屋大学で開催される予定です。

スポーツ社会心理学研究会活動報告

田中ウルヴェ京 ((株)MJ コンテス)

今年度は、スポーツ社会心理学研究会のメンバーが中心となり、日本スポーツ心理学会第 35 回記念大会において、ラウンドテーブルディスカッション (RTD) 「ジュニア選手のためのキャリア教育」を企画・実施しましたので、下記概要報告いたします。

RTD では、まず最初に、研究会メンバーの三木ひろみ先生が、世話人として、「そもそもキャリアアトランジションは、競技引退時のトランジションだけを捉えているのではない。選手はジュニア期からすでにトランジション (節目、転機) を潜り抜けてきているので、ジュニア期からキャリアアトランジションについて考えていくことは重要である」というような趣旨を説明しました。

そして、話題提供者として、JOC ナショナルトレーニングセンター (NTC) エリートアカデミーディレクターの平野一成先生がご登壇。現在の NTC でのジュニアエリート選手に対する JOC プログラムを紹介しました。

エリートアカデミー事業は、NTC の機能を活用し、オリンピックで活躍できるトップアスリートの育成と、教育機関と連携を図りながらスポーツを通して社会の発展に貢献できる人材の育成を目指しているということで、技術、体力向上を目的とした競技力向上のためのプログラムだけでなく、人間形成を目的とした教育プログラム「JOC プログラム」をおこなっているとのこと説明をいた

だきました。そのなかで、核としていることがキャリア教育であり、選手たちの人生は決して競技人生だけで終わるものではないということを根底にしているということでした。

次に話題提供者として、カナダの Dr. Jean Côté (Queens University) が、発達の視点からユーススポーツにおける参与の継続とドロップアウトについて発表しました。スポーツから得られることは、3P (Participation, Performance, Personal Development) であるにもかかわらず、過度な「楽しい域を超えた」トレーニングを早い時期から実施させることによる弊害でのドロップアウトは、その 3P の機会損失になることを研究結果から示唆いただきました。

最後に、田中ウルヴェ京が、実践報告として、JOC で過去におこなった「ジュニア期でのキャリアアトランジション研修」の実施例を報告しました。研修では、ジュニア期の選手に自分で考える能力、自分だけの目標を持つこと、競技目標だけではない人生目標を持つこと、などを実施しており、能動的な意識を持つ選手づくりの難しさを示唆しました。

フロアには、国際スポーツ心理学会 (ISSP) 理事の Dr. Natalia Stambulova (Halmstad University) や、Dr. Dorothee Alfermann (University of Leipzig) も質疑応答に参加。海外の事例などとも比較した話ができました。

平木 貴子 (国立スポーツ科学センター)

毎年、「個」をみることの大切さを旗印に集まった有志の会“臨床スポーツ心理研究会”が開催されていることを聞き、今年初めて参加させていただきました。以下、そこでの体験を報告申し上げたいと思います。

「第18回臨床スポーツ心理研究会」は、平成20年9月11日18時から2時間にわたり、早稲田大学早稲田キャンパス26号館602教室で開催されました。参加人数は54名、半数以上は学生の方々でした。まず、中込四郎先生（筑波大学）から事例を聞く上でのマナーの確認がなされ、フロアにいらした星野公夫先生（順天堂大学 名誉教授）からも本研究会の設立の経緯をご説明いただきました。その後、土屋裕睦先生（大阪体育大学）の司会のもと、事例提供が行われました。

今回は、仙台大学の菊池直子先生より指導者との関係で悩んでいる女子学生競技者の事例を提供していただきました。夢や風景構成法などを用いたカウンセリングの事例でした。2時間という短い時間でしたが、菊池先生が提供してくださる面接過程やそれに対する指定討論者である中込先生のコメントを拝聴いたしました。

私が今回ご提供いただいた事例で考えさせられたこととしては、“競技者が競技を行う意味”についてでした。この事例では、

「人のために（競技を）やってきた」と語る感情を上手く表現できないクライアントが、菊池先生との面接を重ねる中で、実は「競技は自分を出せる場」として機能していたことや「コートの中では楽しかった」ことに気づき、自分を表現する場として競技と向かい合うようになる過程が読み取れました。面接の中で、指導者の「お前がいると（チームの）雰囲気が悪くなる」という言葉に対してひどく傷つけられた体験を語りますが、感情を上手く表現できないクライアントにとって、その指導者の言葉は彼女の存在を否定されただけでなく、彼女の感情を表現する場を奪われた体験にもなっているように感じました。その出来事と同期して、一時期安定していた持病（必要以上にホルモンが分泌され、さまざまな症状が出現する病気が悪化したというエピソードが語られており、自己表現の場を失った代わりに彼女なりの表現を身体で示したような印象を受けました。

競技者にとって、競技とは表現する場であり、自分の内なる課題に向き合い、挑戦していく場であると、本事例を通して改めて思いました。本研究会の参加は、競技者を支援している者として、どのような関わりができるのか（できているのか）を考える良い機会となりました。

この研究会は、東海大学を事務局として、メンタルトレーニングの普及およびレベル向上を目的に活動している。

本年度は、新たに秋田中央支部（スポーツ科学センター会場）と秋田南部支部（平成高校会場）がスタートした。秋田県では、体育協会にメンタルトレーニングアドバイザーという役割のポジションを作り、県の国体や強化チームの心理的サポートを実施している。

各支部会の活動は、東海大学本部では夏季・冬季・春季休暇および休日を除く、毎週月曜日に開催し、毎回100名前後の参加者との情報交換が行われている。北海道支部（旭川工業高校会場）、栃木支部（作新学院大学会場）、関東地区（青山学院大学会場）、静岡県支部（東海大学付属翔洋中・高校会場）、愛知支部（愛知学院大学会場）、関西地区全体会（太成学院大学中学・高校会場）、関西地区専門分科会（太成学院大学中学・高校会場）、北陸支部会（福井県立体育館）では、毎月1回の研究会を開催している。特に、静岡支部会では、新しい傾向として、中学生の参加（毎月300名以上）や保護者の参加が増加している。このように現場のニーズが高まる傾向にあるが、資格保持者や研究者の参加が少ないという本来の目的である「研究と現場の架け橋」「理論と実践のキャッチボール」が難しい状況がある。現場からの参加者は、すぐに応用や活用で

きる実践的な内容（情報）を求める傾向にあり、スポーツ選手・指導者・保護者のニーズに答えることのできる専門家育成とこのような情報をどう取り入れ、研究や実践に発展させるかが今後の課題であると考えている。

また本年度は、「学生メンタルトレーニング研修生の集い」という学生主導の情報交換会をスタートさせることとした。これは、「学生トレーナーの集い」というアスレティックトレーナーを目指す学生の組織が12年前から活動し、その組織からの誘いもあり、全国研修会（早稲田大学で開催：800名参加）に参加したことがきっかけとなった。また「学生トレーニング指導者の集い」というストレングス&コンディショニングを専門にする学生の組織もでき、これらの組織に同調する形で「学生メンタルトレーニング研修生の集い」を作ることになった。本年度は、中京大学で開催される「学生トレーナーの集い」の終了後に、「決起集会」という形の第1回大会を開催する。2009年度は、東海大学を会場として「学生トレーナーの集い」が開催されるために、この大会に協力しながら、終了後に「第2回メンタルトレーニング研修生の集い」を開催予定である。このような背景のもと、スポーツメンタルトレーニング指導士・補の資格を目指す学生の参加を希望している。

樋口貴広（首都大学東京人間健康科学研究科）

2008年5月31日と6月1日の2日間にわたり、八王子セミナーハウスにて運動学習研究会が開催されました。この研究会は年1回の合宿スタイルの研究会です。全参加者が1つの会場で全発表を聞くというスタイルが、参加者全体の連帯感を生み、通常の学会よりも親密なコミュニケーションを取ることができます。

今年は過去最高の54名の参加があり、例年にも増して活気のある会となりました。特に今年はリハビリテーション領域からの参加者が非常に多かったことが、大変特徴的でした。従来から、運動学習研究会はスポーツ科学の研究者にとって有益な集いの場でありました。最近ではそれに加えて、運動学習というキーワードを通して多領域の研究者たちを繋ぐ場としても、重要な役割を担っています。

研究会では口頭発表14件、ポスター発表6件の発表がありました。海外での研究成果報告2件も含め、運動学習や制御に関する様々な発表がなされました。残念ながら、リハビリ領域からの発表者が数件にとどまったため、来年度以降、発表数の増加を期待したいところです。

今年度の研究会は、大きな節目の大会となりました。第1回から代表世話人を務められた麓信義先生（弘前大学）が、今年度の研究会を最後に勇退されました。研究会の創設や発展に多大な功績を残し、2006年には研究会のメンバーを中心とした著書の出版も実現していただきました（麓信義（編）、運動学習の学習と制御—動作制御へのインターディシプリナリー・アプローチ、杏林書院）。その功績に、研究会メンバー一同、感謝を申し上げる次第です。

新しい代表世話人には、山本裕二先生（名古屋大学）が就任されました。山本先生は長年、事務局長として研究会の屋台骨を支えてこられました。名実ともに研究会の“顔”であり、満場一致で世話人兼任が承認されました。新たなリーダーのもと、研究会の更なる発展の予感を感じつつ、大会が終了いたしました。

本大会は首都大学東京が運営を担当いたしました。4名の院生スタッフの尽力により、円滑に会を進めることができました。来年度の第19回は、大阪体育大学にて開催予定です。今年度同様、多くの方々の参加をお待ち申し上げております。



IV. 研究室紹介

石井研究室（人間行動システム専攻）紹介

東京工業大学大学院社会理工学研究科

石井 源信

はじめに

平成 8 年度に立ち上げられた本学大学院社会理工学研究科人間行動システム専攻は、人文・社会科学から理工学までの領域を扱う、文理融合をめざした専攻です。既に 13 年が過ぎて軌道にのってきてはいますが、新たなセカンドステージを迎えるにあたり、一層の発展が求められています。

研究室の特徴

わが研究室は、基本的に運動やスポーツが大好きで、しかもそれぞれがソフトテニス、硬式テニス、サッカー、硬式野球、バトントワリング、舞踊・ダンスなどの競技を経験し、なおかつコーチの立場で進めていきたいと望んでいる学生も多く、また東工大出身者だけでなく、他大学出身者の多いのも特徴です。男性は関東学院大学、上智大学、順天堂大学、東京大学、東京理科大学、日本体育大学、早稲田大学など、女性はお茶の水女子大学、聖心女子大学、日本女子大学などです。社会理工学研究科は文理融合がキーワードですが、わが研究室は理工系、教育系、体育系、人文系のさまざまなカラーをもった学生が融合して、ユニークな集団を形成しています。

現在は、脳研究（fMRI）を精力的に進めている小谷泰則先生と、特別研究員 1 名、博士課程 4 名、修士課程 1 名、研究生 1 名という少数で構成されていますが、来年度は修士の学生が多く受験してくれることを願っています。また博士取得の OB がそれぞれの領域で研究会を運営してくれて活気あふれる雰囲気の中で頑張っています。

これまでの博士号取得者は、楠堀誠司（県立広島大学）、井田博史（神奈川工科大学ヒューマンメディアセンター）、澤田美砂子（日

本女子大学）、高見和至（神戸大学）、加藤久（京都サンガ FC）、島本好平（東京工業大学特別研究員）の 6 名を輩出しており、現在は 5 名が挑戦しているところです。

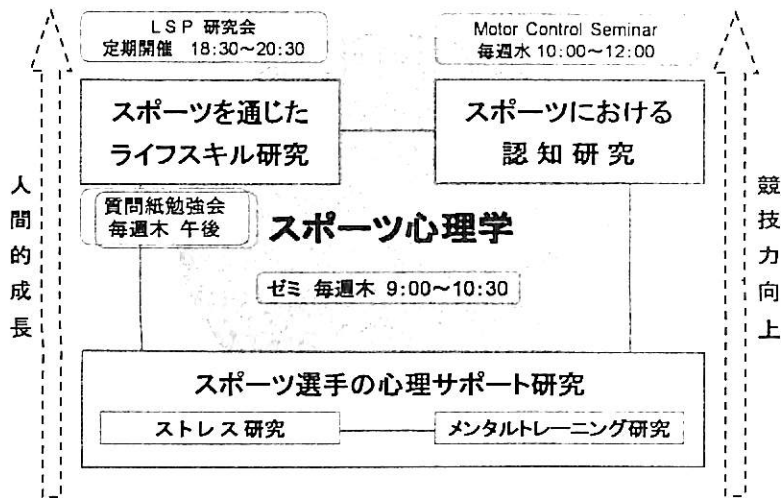
また、修士課程修了者は計 23 名で、その主な就職先は、本田技研、ソフトバンク、NTT 西日本、大和総研、SAP、キーエンス、NEC、NTT コミュニケーションズ、タイコエレクトロニクスアンプ等々、特に理工系の特徴を生かした方面で活躍しています。

研究室の研究内容

本専攻のなかで行動システム講座、身心相関分野に位置づけられる石井研究室では、研究テーマは自由な発想で幅広い領域をめざしています。現在は、特にスポーツ行動のメカニズムの解明とパフォーマンスに伴う人間の心理的過程や心理的影響に関する研究に取り組んでいます。その目的を大きく分けると、競技力向上をめざす研究と人間的な成長をめざす研究であり、この 2 つのめざす方向は別々なものでなく、競技力をあげるためには人間的な成長なくしてはあり得ないというスタンスに立っています。



研究室がある西 9 号館をバックに



石井研究室における研究活動の全体図

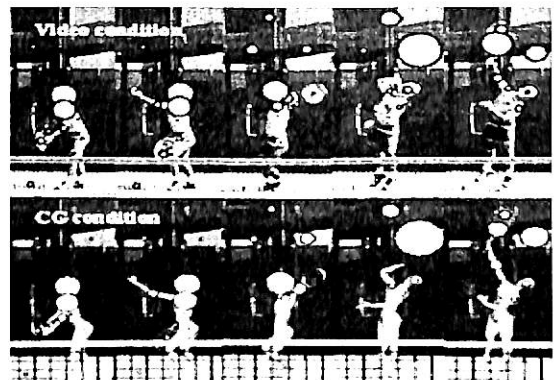
具体的には、上の図に示すように、スポーツにおける予測判断を問題にした「スポーツにおける認知研究」、体育授業や運動部活動など、「スポーツを通じた態度やライフスキル研究」、競技力向上のための「メンタルトレーニングや心理サポート研究」、そしてメンタルヘルス獲得のための「ストレスマネジメント研究」の4つを柱に、それぞれの研究を深めています。なかでもスポーツにおける認知研究には、現在、3名の博士課程の学生が取り組んでいます。

福原和伸君は、テニスのサーブ方向の予測判断に関する研究を行っています。モーションキャプチャーシステムで計測した3次元座標値をもとにCGテニスサーバーを作成し、CGアニメーションが予測判断実験に利用できるのかについて検討しています。CGアニメーションは研究目的に合わせて任意に操作することが可能であり、今後のスポーツにおける認知研究・トレーニングに有効なツールの1つとなる可能性を秘めています。

高橋まどかさんは、熟達したバトントワリング選手の視覚的スキルに着目した、バトントワリングのキャッチングに関する研究を行っています。現在は、眼球運動計測を中心とした実験を進めており、回転するバトン

をキャッチする時の視線をアイマークレコーダーで計測したデータをもとに、熟練者と非熟練者とのキャッチングにおける視線探査活動の差異について調べています。

鹿内菜穂さんは、舞踊における身体動作による感情表現を、鑑賞者がどのように認知しているかということに焦点を当てた研究を行っています。身体を媒介とした空間芸術とされる舞踊を、形状と運動連鎖の情報処理の観点からどう評価するかが今後の主な課題となっています。また、踊り手の表情が舞踊の感情表現の認知に及ぼす影響についても併せて検討を進めています。



ビデオ映像とCGアニメーション

特別研究員の島本好平君は、外部との積極的な連携のもと、スポーツを通じたライフスキル研究に取り組んでいます。平成 17 年 5 月には、石井研究室を事務局とする LSP (Life Skills Program) 研究会が立ち上げられ、現場の監督やコーチ、トレーナー、ドクターの方々とともに定期的にミーティングを実施し、アスリートのためのライフスキルプログラムの開発などに取り組んでいます。また、日本スポーツ心理学会大会においては、LSP 研究会のメンバーによる会員企画シンポジウムを、第 34、35 回大会と 2 年連続で開催しています。



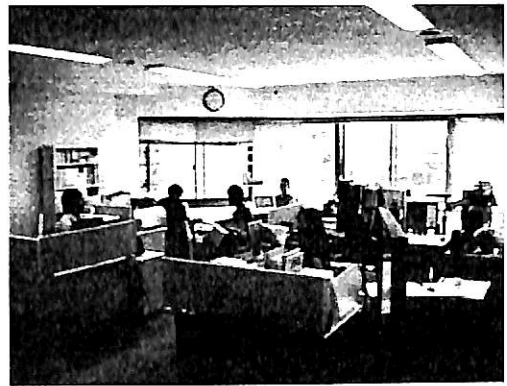
LSP研究会が作成した
スタート教材

研究室の主な行事

研究室の主な行事としては、修士の 1 年生が企画する夏のゼミ合宿です。河口湖、富士急ハイランド、軽井沢、伊豆諸島の神津島や新島など、思い出に残るものとなっています。



伊豆諸島・神津島での合宿にて



和やかな雰囲気の研究室

最近の主な研究室活動として、日本スポーツ心理学会第 34 回大会を日本体育大学、東京女子体育大学、国立スポーツ科学センターの連携のもとで実施したのは記憶に新しいことです。そのような機会を与えていただき、石井研究室のまとまりが一段と強固になっていき、新たな可能性を生み出そうとしているところです。

今後の課題

私自身は社会理工学研究科に所属しながら、健康・スポーツ科目(必須:健康科学、スポーツ実習Ⅰ、Ⅱの3単位と選択:生涯スポーツ実習の2単位まで卒業要件に加えることが可)を担当しています。東京工業大学の学生にとって、心身の健康や体力の維持・増進に加え、コミュニケーション能力やリーダーシップ能力など、集団での適応能力を養う必要性の高い必須科目として、これからも長く存続させ、発展させていきたいと強く願っています。

また、研究室における活動としては、理工系の特徴を生かした健康教育、ならびに新たなスポーツ心理学の分野の開拓をめざして、日々努力していきたいと思っています。

石井研究室ホームページアドレス
<http://www.gi.hum.titech.ac.jp/>

V. 学位論文紹介

発達障害児と健常児の障害物回避能力に関する研究

島谷 康司（県立広島大学保健福祉学部理学療法学科）

学位：博士（学術） 授与機関：広島大学

取得日：平成 20 年 3 月 23 日 指導教官：山崎昌廣教授、関矢寛史准教授

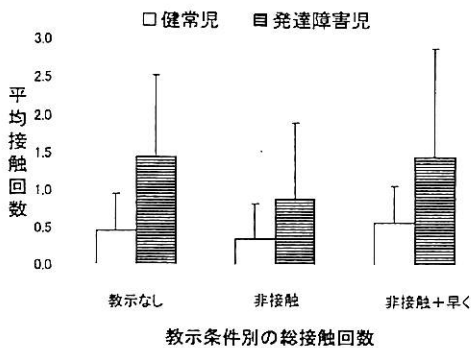
本研究は、発達障害児がくぐり動作において障害物に接触する原因を明らかにすることを目的として 5 つの実験を行った。第 1 章の序論では、発達障害児の身体接触の先行研究と理学療法の臨床観察から発達障害児の身体が接触する要因についてその概要を明らかにした。第 2 章では、発達障害児の障害物接触の頻度の検証、および注意機構と接触頻度の関係について検証した。第 3 章では、発達障害児の障害物接触頻度と粗大運動能力の関係について検証した。第 4 章では、発達障害児の障害物接触頻度と姿勢制御能力について検証した。障害物を回避するためには環境に対する身体イメージが重要であることから、第 5 章では、従来のリハビリテーションで行われている身体イメージの評価を実施し、障害物接触回避を予測することができるかについて検証した。そして、第 6 章では、身体イメージをより直接的に評価するために、障害物との接触を見積もる能力について検証した。本実験すべての実験参加者を、体格に差のない 5～6 歳の注意欠陥/多動性障害あるいはアスペルガー症候群の診断を受けた知的障害のない発達障害児 9 名と健常児 9 名とした。

障害物を回避するためには様々な能力が必

要であることが報告されているが、発達障害児はこれらの能力が劣っているために接触回避が困難であることが予想された。障害物に接触する幼児は粗大運動能力が低く、事故や怪我に繋がるということが報告されており、理学療法士による臨牀的観察においても、発達障害児はくぐり動作時に障害物に接触している。これらのことから、発達障害児はくぐり動作の接触回避が困難であるため、事故や怪我に繋がる可能性があり早急な対策が求められる。

ヒトが障害物を回避するためには、障害物の形状や空間位置の知覚が必要であり、それには視覚と注意機構が重要である。また、視覚は障害物に関する情報を事前に得て、身体を予測的に調整するフィードフォワード制御での役割を担っている。そして、このフィードフォワード制御による障害物回避の見積もりには、身体イメージが重要な役割を果たしている。さらに、障害物を回避するために姿勢を大きく変化させる場合、粗大運動能力や姿勢制御能力が重要となる。

第 2 章（第 1 実験）では、発達障害児が障害物に接触する頻度が高いのかどうかを明らかにすることを目的とした。異なる教示条件下における注意機構と接触頻度の関係を明らかに



することを目的とし、接触した障害物の高さや接触した身体部位について課題は、7種類の遊具と高さの異なる6つのバーを交互に設置したコースを往復し、バーをくぐり抜けることであった。そして、何も教示を与えないで行わせる条件（教示なし条件）、バーに接触しないように教示した条件（非接触教示条件）、そしてバーに接触しないようにゴールに早く移動するように教示した条件（非接触+早く教示条件）を行わせた。その結果、発達障害児は健常児と比較して、条件に関わらず接触頻度が高かった（図）。また、腰部への接触頻度が高かったが、接触したバーの高さに差は見られなかった。さらに、各教示条件において差がなかったことから、接触回避の注意喚起が発達障害児の接触頻度を減少させたとは言えなかった。また、肩-膝間の高さの2本のバーの間を上下のバーに同時に注意を向けながらぐるぐる課題において、発達障害児と健常児の間に差は見られなかった。これらのことから、バーへの接触頻度が高いということと注意の欠陥とは関係が低いことが示された。

第3章（第2実験）では、幼児の粗大運動能

力が低い場合に、障害物に接触することが予想されることから、発達障害児の粗大運動能力を検証することを目的とした。方法は、粗大運動能力を測定する運動能力テストである杉原ら（2002）の幼児運動能力検査法に従った。課題は敏捷性を評価する25m走、立ち幅跳び、協調性を評価するボール投げ、連続跳び越し、捕球、持久力を評価する身体支持持続時間の6種目であった。その結果、すべての種目において発達障害児と健常児に有意な差はなく、発達障害児の敏捷性、協調性、持久力などの粗大運動能力は健常児と同等であった。このように発達障害児は健常児と比較して粗大運動能力は同等であるにもかかわらず、障害物に接触する頻度が高いことが明らかになったことから、発達障害児が障害物に接触する頻度が高いことと粗大運動能力とは関係が低いことが示された。

第4章（第3実験）では、安定した動作によって障害物との接触を回避するためには姿勢制御能力が重要であり、視覚、体性感覚、前庭感覚による平衡機能が深く関係していることから、発達障害児の平衡機能の特徴を明らかにすることを目的とした。重心動揺の測定方法は、日本平衡神経科学会検査基準に従った。測定項目は、総軌跡長、外周面積、重心動揺実効値、単位軌跡長、単位面積軌跡長、外周面積における閉眼/開眼動揺比の全6項目とした。その結果、健常児の開眼条件は閉眼条件と比較して重心動揺範囲に差は見られなかったが、発達障害児は視覚フィードバックが利用できない閉眼

	LNG (cm)		EA (cm ²)		RMS (cm ²)		L/T (cm/s)		L/EA (1/cm)		ロンベルグ率 (%)
	開眼	閉眼	開眼	閉眼	開眼	閉眼	開眼	閉眼	開眼	閉眼	
健常児	56.9±16.6	74.0±30.3	40.8±22.8	49.6±24.8	4.5±2.5	5.1±2.2	18.9±5.5	24.7±10.1	1.6±0.5	1.6±0.3	134.5±47.9
発達障害児	83.4±20.0 ^{##}	149.3±91.5 ^{##}	58.7±32.9	125.6±76.6 ^{##}	5.6±3.1	12.0±7.7 ^{##}	27.8±6.7 ^{##}	49.8±30.5 ^{##}	1.7±0.6	1.3±0.5	231.8±108.1 ^{##}

発達障害児と健常児の群間比較を示す : #p<.05, ##p<.01

開眼条件と閉眼条件の条件比較を示す : ** p<.01

条件において重心動揺範囲が増大した。しかし、体性感覚・前庭感覚の機能を表す各指標に健常児との差は見られなかった(表)。このように、体性感覚、前庭感覚に異常が見られないにも関わらず閉眼条件において重心動揺範囲が増大したことから、発達障害児において感覚情報の統合が発達遅延の状態であり、視覚依存性の姿勢制御を行っていることが示された。

第5章(第4実験)では、障害物回避に重要な身体イメージを評価するために、従来の人物描画検査と肢位模倣検査による身体イメージ評価によって障害物回避能力を予測できるのかを調べることを目的とした。方法は、人物描画検査にはグッドイナフ人物画知能検査法(小林茂雄:1992)に従い、田中ら(田中:2001)の身体15部位分類を用いて採点した。肢位模倣検査には南カリフォルニア感覚統合検査法(日本感覚統合障害研究会:2005)を用い採点した。その結果、発達障害児は健常児と同等に人物描画が可能であったが、肢位模倣は劣ることが明らかとなった。しかし、人物描画は描画する手指機能の熟達に影響し、また、肢位模倣は肢位を再現するために自己の身体で正確に

運動を実行する必要があることから、両検査ともに知覚や運動の要素が影響を与えると考えられる。したがって、身体イメージの評価法としては不十分であり、障害物回避において重要となる身体イメージについては、より課題特異的な評価を行う必要があると言える。

第6章(第5実験)では、従来の身体イメージ評価では、くぐり動作による障害物接触回避能力を予測することが困難であることから、身体イメージをより直接測るために、発達障害児の障害物との接触を見積もる能力を明らかにすることを目的とした。方法は、視覚弁別課題として、7m離れた位置から異なる高さの2本のバーを比較させた。また、見積もり課題として、異なる高さのバーを1本ずつ呈示し、かみ込むことなしに、身体を接触させずに通り抜けることができるかどうかを回答させた。その結果、発達障害児は2本のバーの高さを弁別する能力は健常児と同等であったが、障害物と身長を比較して、接触回避を見積もる能力は劣っていた。さらに、発達障害児の見積もり課題の正誤内容を調べた結果、発達障害児は身長より低いバーに対して通り抜けることができると

誤答していることが多いことが示された。

最終の第7章では5つの実験によって得られた結果から、発達障害児は健常児と比較して感覚情報の統合が発達遅延しているために、視覚に依存しなければ姿勢制御が困難であること、そして障害物に対して身体イメージに基づいた障害物接触との回避の可能性を見積もることが困難であることが示された。身体イメージは、障害物を回避するために重要であることが明らかにされており、視覚と体性感覚の感覚情報が統合されることによって形成される。しかし、発達障害児は視覚に依存し、感覚情報の統合が発達遅延することによって身体イメージが形成されないため、これらの問題を持つ発達

障害児は、くぐり動作において接触する頻度が高くなることが示唆された。

付記：広島大学大学院総合科学研究科人間科学部門身体運動科学領域の関矢寛史先生には、博士論文作成にあたり研究段階から綿密なご教示を賜り、温かく見守ってくださりながらも的確なご指導をいただきましたことに謹んでお礼申し上げます。また、同研究科山崎昌廣教授には、博士論文作成にあたり総括を賜り、謹んで感謝申し上げます。また、博士論文作成に当たり貴重なご助言を賜りました先生方、実験にご協力いただきました皆様には、謹んで感謝申し上げます。

VI. 研究トピック

竹中 晃二 (早稲田大学人間科学学術院)

表記題目の研究は、現在、日本体育協会スポーツ医・科学専門委員会のプロジェクトとして行われている研究です

(<http://www.japan-sports.or.jp/medicine/lab0/index.html>). このプロジェクトの目的は、わが国の子どもを対象に、身体活動ガイドラインを作成し、そのガイドラインについて健康度への根拠を示すことです。その先には、身体活動ガイドラインをツールとして、身体活動量増強および運動の実践について普及啓発活動を行うことも含まれています。特に、どのように運動・スポーツの実践、また日常の身体活動量の増強を子どもに行わせていくのかという普及振興策に関わる課題は体育を中心に議論したとしても、体育以外の領域をいかに巻き込んでいけるかにかかっています。以下、このプロジェクトにおける運動・身体活動の普及啓発に関わるいくつかの課題を述べます。

世論にまで高める必要性

現在まで、多くの専門家や公の組織が子どもの運動不足に関連して危惧する問題を取り上げ、子どもに運動・スポーツの実践がさらに必要であることを述べてきました。例えば、運動をよくする子どもとしない子どもの2極化現象の存在について、また体力・運動能力テストで見られる体力低下についての指摘です。しかし、このような議論は、体育・スポーツ領域の中にとどまっており、体育の日など特別なイベントを除いて、社会への広がり、つまり世論としての広がりを見せているとは言えません。その理

由として、その議論の先が体育の教科だから、スポーツが好きだから、という既得権の確保やさらなる獲得、例えば体育授業時間数の確保やスポーツ振興をさらに広げるためという、体育・スポーツ領域における「内向き」の議論に終始していた感が強いからです。現在の議論を世論にまで高めるためには、体育・スポーツ領域以外の人たちに対してその必要性をいかに説得し、彼らをも巻き込んだ議論や普及活動に進化させていく必要があります。

環境要因への配慮

現在の子どもは、暖衣飽食の中を生き、さらにはエスカレータ、エレベータの普及や保護者によるクルマ送迎など、身体を動かさなくてもよい日常生活に浸っています。子どもの世界における遊びの内容も多様化しており、コンピュータ、テレビゲーム、ビデオ、テレビなど進化し続ける娯楽の中で、子どもがそれらの魅力を天秤にかければ、外遊びなど身体を動かしたいという衝動や欲求が低下していきます。もっと身体を動かすべきだと奨励する一方で、犯罪や都市化の影響によって、子どもだけで遊べる安全な遊び場が減少していることも活動の機会を減らす要素となります。このように身体活動・運動の実践、自由な外遊びを行うことを妨げる環境要因は多く存在し、しかも今後もこのような環境の変化は「便利さ」という名の下に加速的に進行していき、逆に身体活動や運動の実践にとっては悪影響となっていきます。いわば、進歩のパラドックスとも言える環境の変化

に対して、運動・スポーツの実践や日常の身体活動量の増強をどのように行わせていくかという課題を決めることは時代へのチャレンジです。

家庭への啓発活動の必要性

子どもを見守る保護者側の論理や条件、社会的傾向も活動実践を勧める際に無視できない問題です。知育偏重・早期教育の加熱化、手をかけ過ぎる子育て（溺愛傾向）、家庭環境の複雑さなどによって、子どもは様々なストレス（刺激の多さ、人間関係の難しさ、将来へのプレッシャーなど）を受け、それによりストレス耐性の低下、易怒性の高まり、現実志向（計算高さ）、リアリティの欠如（汗かいて、手を汚しての経験不足）などが生じています。こういった状況の中で、子どもにとって基本的な生活習慣、すなわち「動く、食べる、寝る」の3要素が相互に乱れています。そのため、例えば体力向上指定校や体育授業の強化のように、学校内のアプローチだけでは対処できない現実があり、家庭への働きかけ、また学校、地域、家庭の理解と連携が重要な課題となっています。現在、家庭、しかも運動・スポーツに興味を示さない保護者をいかに巻き込んだ介入プログラムを開発するかは緊急の課題となっています。

アプローチのパラダイムシフト

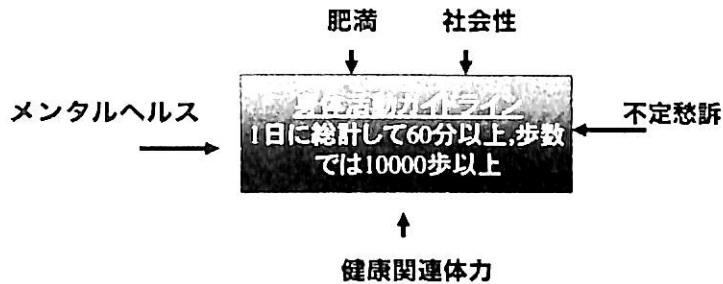
普及活動の方策にも留意する必要があります。運動をよくする子どもとしない子どもの2極化の存在が指摘され、久しく時が経っているにもかかわらず、この傾向はますます進んでいるように思えます。しかし、現在行われている政策は、運動する子ども、例えばスポーツ少年団などの競技志向の子どもに注目し、彼らをい

くら強化しても、もう一極の様相は変わらないどころか、ますます増加していきます。しかも、勝利至上主義、報酬化、障害など弊害にも配慮が必要となっています。一方、運動しない子どもは、なぜしないのか、どういうことならするのか、いつできるのか、どこでできるのか、などの要因や原因を見極めた上で、それらの情報に適合した対処が求められます。運動をしていない、またしたくない子どもに注目し、彼らができる場所、時間帯、内容について工夫し、まずは参加させる仕掛け作りの開発にも力を注ぐ必要があるのです。加えて、2極の間に位置する中間層にも配慮し、一律のアプローチから段階別対処法の開発や男女別、年齢別、環境別のアプローチの開発など、対象となる子どもの特徴やニーズにセグメント化した政策が求められています。

体力測定信奉への反省

従来、子どもにさらなる運動・スポーツの実践が必要な根拠として体力低下があげられていました。そのため、体力強化を目的として、体力向上の名の下に、いわば押しつけ的な活動が学校を中心に行われていました。しかし、一律に強制すれば、反発や嫌悪感を招き、その結果、習慣化には結びつきにくくなります。また、熱心な担当者が異動すればそのような活動は下火になっていきます。加えて、現在の子どもにとって、何のための体力かという議論も必要です。すなわち、スポーツするための体力か、健康維持のための体力か、さらには将来に続く健康維持のための体力かなど内容も合わせて何の体力を第一位の目標に据え、その後に必要な体力要素を加えていくような段階的な目標設定も考えられます。

わが国のガイドライン構想 成果を支える最低限の基準の設定



普及啓発活動のツールとしてのガイドラインの活用

本研究プロジェクトでは、子どもに必要な最低限の身体活動ガイドライン（量）を設定し、その内容は運動・スポーツの実践だけでなく日常生活における様々な身体活動、すなわち生活活動にも及んでいます。しかも、そのガイドラインの根拠として、体力だけにとどまらず、肥満、ストレス、不定愁訴などの健康度への影響を見えています。諸外国の身体活動ガイドラインが、実は成人のガイドラインを援用しているものであったり、その延長線上にあるものであったりと、十分な根拠を示していないのに対して、本プロジェクトでは、図1に示したように、健康度への影響を見ることでわが国独自のガイドラインの信憑性を確保しようと努めています。

本プロジェクトで開発された身体活動ガイドラインは、わが国の子どもに対して運動・スポーツの実践および日常の身体活動量増強を普及啓発するためのツールと位置しています。つまり、ガイドラインの普及啓発ではなく、運動・スポーツの実践および日常の身体活動量増強の普及があり、ガイドラインはその補助教材として使用するつもりです。今後、普及啓発にあたっては、学校と家庭の連携、習慣化介入プログラムの開発・評価、地域や環境に応じたバラエティ豊かで実用的な指導書も含めて開発するつもりです。ご感想を頂ければ幸いです。

VII. 海外情報

北米やヨーロッパにおいては、わが国と同様に、学校体育に限らず、スポーツや運動を通じた教育やその応用が強調されています。今回はこの場をお借りして、特に北米とヨーロッパのスポーツ心理学（体育心理学も含む）領域において最近行われている新しい動きを紹介します。

Weinberg & Gould (2007)は、スポーツ心理学に携わる者の役割として、研究と教育、さらには研究から得た知識を現場に応用することであると述べています。すなわち、研究結果を現場に応用できるように、その内容をわかりやすく伝えることは、私たちスポーツ心理学者の大切な役割のひとつです。しかし、時間の制約など様々な理由で、わかりやすく現場の人に伝えるという「現場への応用」が立ち遅れているのも事実です。一方で、体育心理学やスポーツ心理学の教育を十分に受ける機会のなかった人が、アスリートやコーチに向けてセミナーやワークショップが行っている現実もあります。北米では、このような状況の改善を目指して、新しい取り組みがはじまりつつあります。

北米においてスポーツ心理学の研究や介入を担う Association of Applied Sport Psychology (2008年より改名)は、学会大会における新たな取り組みとして、開催都市在住のアスリートやコーチを対象にしてワークショップを開催することにしました。今年の学会大会は、ユタ州のソルトレイクシティで開催されますが、4日間の大会

期間の最後に EXPO と称して、アスリートとその家族、そしてコーチのためのプログラムが用意されています。EXPO の大きな目的は、1) アスリートがスポーツや運動を楽しみ、充実した経験を持つための提案を行う、2) すぐれた競技成績を残すための手助けを行うことです。具体的には、アスリート自身は、目標設定、自信向上、モチベーション、注意集中、リラクゼーションなどの心理的スキルについて学び、家族は、ポジティブな姿勢で子どもを育て、サポートする重要性について考え、コーチは、チームにとって不調なシーズンを乗り切る方法やスポーツパーソンシップの教授内容について学ぶことができます。また、ユタ州でよく知られているプロアスリートをキーノートに招待するなど、地域に密着した魅力的なプログラムになるように工夫がなされています。

一方、ヨーロッパでは、若い世代のスポーツ心理学者たちがキャリアを積み上げていくためのネットワークづくりや、スポーツ心理学についての情報交換を積極的に行うために、2003年に European Network of Young Specialists in Sport Psychology (ENYSSP)が設立されました。この組織は、研究、教育、および応用の3つの部門に分かれ、各々の分野でどのような経験を積んでいけば若い世代のスポーツ心理学者が自立していくことができるか、そしてその具体的な方法について意見交換がなされています。初めて学術論文を国際誌に投稿する

際に必要なポイントやコンサルタントとして独立する際の準備など、メンバー同士の意見交換のみならず、経験ある研究者やコンサルタントからの情報も得られ、若手の成長を支援するシステム作りがなされています。また、現在、このメンバーは、アメリカ、カナダ、日本、ブラジルを含め世界24カ国、約100名となっており、国際的な組織に発展しつつあります。今年、イタリアにおいて5回目のワークショップが開催予定になっており、多くの若手が楽しみにしています。

研究結果を研究者同士のみならず、現場

のアスリートやコーチなどに積極的に発信し、知識や研究の成果を現場に還元する。その時間や機会を見つけるのが困難であれば、学会大会を一つの実践の場とする。経験が浅いために、手探りの状態であれば、情報交換の場を自ら作り、成長の糧にする。これらの試みは、現在、欧米で進んでおり、今後わが国にも同じムーブメントが必要な気がします。次世代のスポーツ・体育心理学者の成長を願う試みを、体育心理分科会においてもぜひ実現させていただきたいと思います。

以下、関連の url です。

Weinberg , R. & Gould. D. (2007) Foundations of Sport and Exercise psychology.

AASP EXPO: <http://www.sportpsychexpo.com>

ENYSSP: <http://www.enyssp.org>

村山 孝之（金沢大学保健管理センタースポーツ教育部門）

2009年6月17日から21日にかけて、ISSPに参加してきました。第12回となる今回のISSPは、モロッコのマラケシュという日本から遠く離れた西果ての地で開催されました。日本が“日の出ずる国”と称されるのに対し、モロッコは“日の没する国”と称されるそうです。赤レンガでつくられたマラケシュ独特の街並みはとても美しく、古き王朝の歴史を感じさせるものでした。

ところで、私にとって今回のISSPへの参加および発表は、4年前のシドニーに続き2回目でした。ISSP直前には北米でNASPSPA（北米スポーツ心理学会）が開催されたこともあり、北米からの参加者は少なく、参加者の多くが欧州勢でした。そのため、プログラムや発表内容に関しては主に欧州の動向が反映されていたように感じました。

今回私は‘あがり’、運動制御、運動学習、知覚、認知、感情などをキーワードに色々な発表を聞かせていただきました。特に‘あがり’に焦点を当てたとき、4年前とは明らかに異なる特徴がありました。それは、‘あがり’研究においてもようやく質的な分析方法が導入されてきたということです。例えば、従来の‘あがり’研究においては、注意の変化がパフォーマンス低下の原因であるとされ、両者の関係を実験的に調べる研究が圧倒的に多くみられました。しかし今大会では、注意の変化を質的な分析手法によりカテゴライズしようと試みる研究がみられました。私自身も‘あがり’を質的に捉えようとしたことがあるため、非常に興味深く聞かせていただきましたが、質的、量的という枠組みは、あ

くまで方法論的な分類であり、どちらか一方のみを重視しては‘あがり’のような複雑な現象を理解することは困難です。改めて、両者の特徴を活かした包括的な研究が必要であると感じました。

また、運動学習の分野においては、年齢に関わらず、顕在学習よりも潜在学習の方が学習効果が高いという結果を示す発表がありました。やはり高齢者にとってはワーキングメモリーの負荷が低いということからも潜在学習の方が適しており、現場での運動指導にさらに活用される必要があると思いました。現在私は体育授業や運動部活動で指導を行なっています。初心者から熟練者までを対象としており、様々な特性に応じた運動学習を毎日模索しております。熟練者に対してつつい顕在的な手がかりをたくさん与えそうになることもあります。また、以前から祖父の術後の機能回復のために運動学習の視点からみたアプローチ方法を考えているところでした。この高齢化社会の中では高齢者への運動学習に対しても高い関心が寄せられています。実際、日本スポーツ心理学会においても、理学療法士や作業療法士の方々が多く参加してくださっています。国内外の知見を活用することによって、スポーツやリハビリテーションなどの運動指導の現場でより効果的な運動学習が実現できるように、今後も更なる人間理解を深めたいと思いました。

また、今大会ではメンタルトレーニングに関する話題も充実していたように思います。例えばリアル・マドリッドにおけるバイオフィードバックの事例や、北京オリンピックに向けて中国が行

なってきた心理的サポートの事例が紹介されました。両者に共通する点は、高度なバイオフィードバック(あるいはニューロフィードバック)装置を用いたリラクゼーショントレーニングが行なわれていることでした。自己の心身の状態をオンラインで把握できるシステム,あるいはfMRIのような非侵襲的な脳機能計測装置が以前よりも選手の身近なところにあることを改めて実感しました。おそらく、ハードウェアの部分は今後さらに発展し、より安価に、容易に現場に導入されることになると思います。その一方で、それだけに依存すればソフトウェアの部分が育たなくなってしまう。メンタルトレーニングが、子供から高齢者まで、学校部活動から競技スポーツまでといった幅広い属性を対象とする中で、

ハードとソフトのバランスをいかにとるかが重要であると感じました。

最後に、今大会では日本からの参加者も多く、ポスター発表や口頭発表の場で活発な意見交換がされていました。私もいい加減な英語で回答したり質問したりさせていただきました。ISSPは広範囲を対象にしているため、専門分野外の方からも貴重な意見をもらうことができます。あるモロッコのナショナルチームのコーチがポスターの前に来られ、アジアの学会にも行ってみたいと言っていたのが印象的です。次回は北京での開催となります。国や立場の壁を超え、研究や実践における交流をますます盛り上げるためにも、次大会での発表をあらたな目標の1つに据えたいと考えております。

村上 貴聡 (東京理科大学)

今年の6月17日-21日にかけて、第12回国際スポーツ心理学会 (12th World Congress of Sport Psychology) がモロッコはマラケシュにあるリゾートホテルで開催された。モロッコ第3の都市であるマラケシュはアトラス山脈の北に位置し、砂漠の外縁の街といわれている。学会期間中はなんと気温が45度!もあり、梅雨入りしたばかりの日本とは随分違う暑さだった。国際スポーツ心理学会はというと、4年に一度世界各地で開催されており、私は前々回のスキアトス(ギリシャ)、前回のシドニーに続き、3回目の参加だった。学会へは世界各国から約700名、そのうち日本からは約60名の参加ということであり、これまでの学会以上に多くの研究者が参加していた。

学会前の二日間はプレワークショップが開催され、内容は目標設定の方法やチームマネジメントなど performance enhancement に関するものが中心であった。また、オープニングセレモニーに引き続いて学会が始まると、キーノートレクチャーやシンポジウムなど数多くのセッションが行われた。プログラムによると、今大会のテーマは「Meeting New Challenges and Bridging Cultural Gaps in Sport and Exercise Psychology」であり、科学と実践との融合を強調していた。また、発表数はキーノートレクチャー9演題、シンポジウム51演題、ワークショップ8演題、口頭発表256演題、ポスター発表424演題であ

った。そのうち日本からの発表はポスターを中心に60演題ほどあり、多くの研究者が参加していた。



写真1：会場となったホテル

私は performance enhancement に興味があるため、これに関連するセッションを中心に参加した。特に、アニカ・ソレンスタムを師事した P. Nilson 氏と L. Marriott 氏の話は興味深い内容であった。彼女らは「Vision 54」というゴルフスクールを主催している。「54」とは、全ホールでパーディを取ると出るゴルファーにとって憧れのスコアである。そのスコアを目標にしながら、常に向上心を持ち、常により良いプレーをするために練習をすることが重要で、そのために下記の質問を必ずするとのことである。1) 今日学んだこと、2) 今日のラウンドで一番思い出したいこと、3) スコアよりも気になったこと、4) 今日のラウンドで1番良かった経験、5) 今日のラウンドで1番悪かった決断、6) どこを狙い、何に集中していたか、7) 次のラウンドに備えること。これは他の種目でも活用できることであり、長所に焦点を当てているように感じた。また、Z.

Li-wei 氏と Z. Zhong-qiu 氏による「Behind Excellence: Mental training Program for Chinese Medalists in Beijing Olympic Games」というセッションもあり、昨年の北京オリンピックにおける心理サポートについての内容だった。中国では代表の 20 チームに対して、32 人のスポーツ心理学者が、注意や感情のコントロール、目標設定、コミュニケーションなどの問題に対処するためにサポートしていたとのことであった。そして、試合会場にはキャンピングカーを改造したリラックスルームなどを設置し、選手も利用していたとのことであった。中国でも心理サポートはニーズがあるのだということが印象深かった。今学会のセッションでは中国からの研究者の口頭発表も多く、勢いを感じた。ところで、口頭発表とポスター発表の領域は下記のとおりである。



写真 2 : P. Nilson 氏と L. Marriott 氏の講演



写真 3 : Z. Li-wei 氏の発表会場

・口頭発表

Anxiety and Stress, Motor control learning, Attention and concentration, Burnout, Career development, Coaching, Group Dynamics and cohesion, Doping, eating disorder, Youth sport and exercise, Elements of excellence, Emotion and coping in sport and exercise, Imagery, Injury and rehabilitation, Leadership, Methodological tools in sport and exercise, Motivation, Performance enhancement and mental training, Psychology of well being, Soccer, Quality of life,

・ポスター発表

Motor learning, Motor performance, Cognition(73 演題), Psychological tools, Methods, measures(30 演題), Motivation, Motivational Climate, achievement goals(42 演題), Anxiety, Stress, Burnout, Emotion, Agression, Anger (66 演題), Health, Well-being, injury, traumatism (66 演題), Coping(17 演題), Cultural diversity and sport(7 演題), Sport Psychology and Sport Psychologists (22 演題), Youth Sport, Student sport(24 演題), Cohension, relationship (5 演題), Self-concept, Self-esteem, Self-talk, Self-regulation (8 演題), Values in sport, socialization, Others (10 演題), Coaching (16 演題), Mental Training, psychological skills, social support, imagery (40 演題),

最後に、私の発表は学会初日であったが、オープニングセレモニーの前のセッション

だったためか、ホスターの会場にはあまり人がおらず拍子抜けしてしまった。インフルエンザの影響のためか、ホスター発表も欠席者が多かったような気がする。また、レジストレーションに時間がかかりすぎる（3時間も待った先生もいたそうである！）、あるいはプログラムや会場が急に変更になるなど、運営面での問題も見受けられた。次回は4年後に北京で開催されること、より良い学会になるために改善されることを期待している。



写真 4：筆者

町田 萌 (ミシガン州立大学博士課程スポーツ心理学専攻)

初めての ISSP 学会の経験はとても興味深いものでした。連日 40℃を超える暑さにも関わらず、会場には世界各国からのスポーツ心理学者が集い、あちこちで様々なディスカッションが繰り広げられていました。しかしモロッコという土地柄のせいなのか学会期間中は、時間がゆっくり流れているような感覚で、参加者もリラックスした雰囲気の中で臨んでいたように思います。

私は搭乗予定のフライトがキャンセルになり、学会には1日半遅れての参加だったのですが、限られた時間の中でも自身の研究やコンサルティングに通じる発表を色々見ることができとても勉強になりました。例えば Dr. Packianathan Chelladurai のスポーツマネジメント研究とスポーツ心理学研究がお互いにかに貢献できるかに関するレクチャーでは、私の今行っているリーダーシップの研究のヒントになるような理論が紹介されていましたし、また、Dr. Terry Orlick のワークショップや Dr. Keith Henschen のレクチャー、Dr. Goran Kentta の発表は自分のコンサルティングの仕事にすぐにも活かせるような話が聞けて、とても良かったです。さらに絵を使う研究など北米のスポーツ心理学ではなかなか見ることの出来ない質的研究が見られたのも収穫でした。日本やカナダなどでのパラリンピック選手とのコンサルティングの経験や研究の発表も大変興味深いものでした。

学会での私の研究発表 (Predictors of Multidimensional Self-Confidence in Collegiate Athletes 「大学生アスリートの多面的自信に関

する研究」) は、長い時間と労力を費やした修士論文の一部であったこともあり、感慨深いものとなりました。もっと上手く出来た、と思うところはたくさんありましたがこういった大規模な学会で発表できたことはとても良い経験だったと思います。近畿大学の小川千里先生をはじめ、発表を聞きにきて頂いた方から研究に興味を示して頂けたり、良いディスカッションができたりと、とても有意義なものになりました。

私は現在米国に留学中であることもあり、北米以外での学会には初めての参加、発表となりました。各国からの参加者の方々の話を聞けて、スポーツ心理学へのアプローチを学べたことはとても良い勉強になったと思います。ISSP に参加して、自分のスポーツ心理学に関する視野が北アメリカに偏っていて、まだまだ狭いということに改めて実感しました。今回は北米スポーツ心理学会 (NASPSPA: North American Society for Psychology of Sport and Physical Activity) の補助もあり、この学会に参加できたことをとても嬉しく思います。4年後の北京での大会の際には、自分がどこにいるかは分かりませんが、今からまた参加できるのが楽しみです。

最後になりましたが、学会では、世間知らずの私に日本の先生、大学院生の方々からたくさんの助言、励ましの言葉を頂き、とても感謝しています。この場を借りてお礼申し上げます。有り難うございました。



学会会場



マラケシュの町の風景、荒木香織先生（兵庫県立大学）と



シンポジウム「Sport Psychology Consulting at the Olympic and Paralympic Games: An International Perspective」から

中本 浩揮 (鹿屋体育大学)

ISSP どころか大きな国際学会自体が初めての私にとってはスポーツ心理学者の数と演題数の多さに単純に驚かされた。発表のある4日間のうち、シンポジウムと口頭発表がそれぞれ51セッションずつで、その中に発表が4-5題、キーノートが9セッション、ポスター発表は300題近くである。この膨大な量の研究の中、シンポと口頭が同時刻に開催されたため泣く泣く聞けない演題もあったが運動学習・制御系の発表を中心に参加した。

最近の重要なトピックの一つに、他者の行為を観察するだけで観察者自身もほぼ等価の脳領域が活性するというミラーシステムの発見がある。かなり乱暴に言ってしまうと、新たな知覚システムの発見であり、簡単に示せば、知覚⇒行為ではなく、知覚⇔行為という考えを提供してくれる。知覚と行為の双方向性そのものの考えは当然新しくないが、ミラーニューロンの発見以来、行為が知覚に影響することはもはや議論の余地がなく、知覚研究を進める上で必須の思考になったといえる。

このトピックを扱った研究は本大会でもいくつか見られた。特に、ドイツのBielefeld大学に所属しているSchack氏らの研究グループは、行為の知覚が観察対象となる動作への注意と観察者の運動表象の構造化の程度に影響されることを非常に伝統的な反応時間課題から明らかにしていた。ミラーシステムを見るためにはfMRIなどの高額な機器が必要だと決め込んでいた私にとっては目から鱗の実験デザインであり、

同様に熟練者のパフォーマンスが阻害される要因を探すことで、熟達化の特徴を探るというデザインも逆の思考を持っていた私にはとても新鮮に感じられた。彼らの研究グループは、一貫してBACs (basic action concepts) という考えに基づいており、SDA-M という分析法を用いて、競技者の複雑な運動表象の構造をクラスター的に単純な行為に分類することを強調していた。

また、Sport Psychology Pioneers と題されたSalmela, Zaichkowsky, Singerなどによるシンポジウムは国際学会ならではの迫力であった。が、そんな著名な5人に対して、全部で1時間半の時間しか与えない学会の無駄な贅沢さは少しがっかりした。誰だったか忘れたが、40年間の研究を10分で話せというオファーにはびっくりしたと言っていた。日本ならこんな失礼ありえないだろう。

初めての大きな国際学会を通して、非常に刺激的な場であることは味わえたが、英語力が恥ずかしいばかりの私にとっては、深く研究を理解できない悔しさと勉強不足を思い知った学会というのが正直な感想である。



スポーツ心理学の先駆者たちの共演

VIII. 日本体育学会第 60 回大会案内

広島大学

2009 年 8 月 25 日～8 月 28 日

日本体育学会 第60回記念大会
体育心理学専門分科会企画について

第60回記念大会において、本専門分科会では、下記の企画を計画しました。会員の皆様の参加をお待ちしています。(専門分科会HPにも掲載しています)

8月25日(火) 学士会館(広島大学内)

15:00~18:00 プレゼンター “体育心理学の研究にとって何が重要か”

— 方法論と研究視点を考える—

司会 岡澤祥訓(奈良教育大学)

演者 吉田 茂(筑波大学)

石井 源信(東京工業大学)

18:30~ 懇親会

8月26日(水)

9:00~10:45 口頭発表(3会場)

11:00~12:00 ポスター発表A

12:00~13:00 体育心理学専門分科会 理事会

(理事の先生方はお集まり下さい。昼食を準備します)

8月27日(木)

9:00~11:00 シンポジウム “体育心理学の体育授業への貢献”

司会者: 西田 保(名古屋大学)

演者: 筒井清次郎(愛知教育大学) 運動学習からの貢献

演者: 杉山佳生(九州大学) 社会心理学的観点から体育授業を論じる

演者: 木内敦詞(大阪工業大学) 健康運動心理学に基づく大学体育授業

11:10~12:00 体育心理学専門分科会 総会

(会員の先生方は、そのままお残り下さい。)

8月28日(金)

9:00~10:00 キーノートレクチャー1 “運動に伴うポジティブ感情の変化と運動の継続化”

司会者: 大浦隆陽(福岡国際大学)

演者: 橋本公雄(九州大学)

10:10~11:10 キーノートレクチャー2 “体育心理学と「学習指導要領」との接点”

司会者: 佐々木万丈(日本女子体育大学)

演者: 長谷川悦示(筑波大学)

11:20~12:20 ポスター発表B

体育心理学の研究方法を考える

吉田 茂 (筑波大学)

岡澤先生から、研究方法の基本問題を討議するという課題をいただきました。方法は目的によって規定されますので、まず私の考えを述べておきます。それは、「体育心理学の目的は、今生きている個人が具体的な心身活動課題を実現する、そのための支援を提供することにある」ということです。この立場から、研究上の3つの問題点とその「落としどころ」を提案します。

1) 構成概念の問題

心理学研究の難しさは、能力、動機など、我々が作り上げた構成概念を相手にすることにあります。これは心理的実体とはいえ、いわば「お化け」であって、そのみに囚われすぎると悪霊にとり憑かれることとなります。幸い、体育心理学は身体活動を基盤に考えるので多少救われます。つまり、構成概念と身体活動の虚実関係の間に、実感としての主観的な感覚・知覚・認知を仲人として据えることができるので、これら「三者の相互結合」をさらに強めていく必要があります。

2) 研究の場の問題

研究課題や対象によって、実験研究、現場研究と分けて行われているのが実情ですが、これはあまり生産的ではありません。最終的に問われるのは、「現場に活かせるか」であるので、緩やかな使い分けをして、双方の「いいとこ取り」をするのが得策です。その際、効果の検証にはやはり比較対照は不可欠であって、交差法、時差法など、ある程度緩和した比較方法を工夫し、「共通理解」をすることが肝要です。

3) 統計的検定の問題

ノンパラメトリック法かパラメトリック法かなど、検定手法の選択は迷うものです。パラメトリック法が優れているといわれていますが、多条件・多サンプル時の計算量節約のためモデル適合性に基づく方法であるという制約が絡んできます。「個人が出来るまでやる」過程のデータを収集する場合は少数例が多いので、正確確率法を採用すればよいと思います。しかしながら、尺度の曖昧性、有意水準の無根拠、妥当性の不充足性、一般化・普遍化の幻想などの問題を依然として抱えており、絶対的判断基準はありません。したがって、「この研究の範囲内で言える結論」として評価していけば十分であると考えます。

私に与えられたテーマは、今後体育心理学では何を研究しなければならないかという視点から、体育の現場に必要な研究のありかたについての提案です。基礎研究であろうが、応用研究であろうが、現場である体育授業やスポーツ場面にとって役に立つことが大前提であり、私は「現場なくして研究はあり得ない」と考えています。いつも問題として指摘される、体育心理学の研究が現場に果たして役立っているのか以下の点から皆さんとともに振り返ってみたいと考えています。

- 1) 今までの原理・原則やそのメカニズムを明らかにする基礎研究（実験室的研究）の成果が現場にどれだけ貢献してきたか
- 2) 今までの基礎研究の成果を基にした応用研究（フィールドでの介入研究）が現場にどれだけ貢献してきたか
- 3) 今までの経験則から実証される応用研究（フィールドでの介入研究）が現場にどれだけ貢献してきたか

“体育の授業”に役立たせるためには教授行動をとる教師に何をどれだけ提供できるかが重要です。2)に相当する基礎研究と応用研究をつなぐ研究、別な言葉でいえば研究者（scientist）でもあり、実践者（practitioner）でもあるパイプ役となる重要な存在が必要になってくると考えます。様々な研究会が展開されていますが、たとえば研究者のみならず、実践者である指導者、教師、トレーナー、カウンセラー、ドクターなどの集まりが重要なパイプ役になりうるものと考えます。研究者と実践者の歩み寄り、コミュニケーションが重要であり、お互いに信頼関係をつくることによって、基礎と応用をうまく結びつけ、現場に役立つ研究が可能になるものと考えます。この辺りのことを活発に議論できれば幸いです。

プレセミナー 資料

テーマ：体育心理学の研究にとって何が重要か

— 方法論と研究視点を考える —

問題の設定

司会 岡澤 祥訓 (奈良教育大学)

このセミナーでは体育心理学の研究では何を目的に研究活動が行われ、その目的を達せするためにはどのような研究方法が適用されなければならないのかという基本的な問題を討議したいと考えています。

昨年のプレセミナーで体育授業研究の立場から統制群はつくらないという私の発言に対して、吉田先生から研究計画法に従って研究は行われるべきであり、統制群をつくる努力は行うべきであるという趣旨の発言があり、議論が盛り上がりました。

体育心理学の範疇をどのように捉えるのかという問題がありますが、ここでは広義にとらえて議論したいと思います。

そこで、体育学研究の編集委員を長年経験された石井先生には、今後体育心理学では何を研究しなければならないのかという視点から、体育、スポーツ現場に必要な研究のあり方について提案して頂きたいと思います。

体育、スポーツの現場に役立つ研究を行うためには二つの方向性があると思います。一つはメカニズム研究といわれる、基礎的な研究です。指導現場で活用できる研究成果はなぜそのようになるのかという、メカニズムがはっきりしていることが必要です。そのためには研究計画法に従った厳密な条件統制下での研究が必要になると思います。条件統制を確実に行うためには、実際の指導場面での研究は困難になります。

メカニズム研究で明らかになった研究成果を指導現場に応用する研究では、実験室で行うほど条件統制が出来ませんが、フィールド研究だから研究計画法を無視していいという訳ではありません。そこで、どのような研究方法が妥当なのかを議論したいと思います。

IX. 事務局報告

平成20年度事業報告（平成19年総会～平成20年総会）

日本体育学会第59回大会関連（於：早稲田大学）

1. プレセミナー

日 時：9月9日（火）16：00～18：00

会 場：8号館B1 101教室

テーマ：体育心理学の知見を体育授業現場にどう活かすか—実践を踏まえて—

演 者：岡澤 祥訓（奈良教育大学）

司 会：鈴木 壯（岐阜大学）

2. キーノートレクチャー1

日 時：9月10日（水）11：00～12：00

会 場：7号館 321教室

テーマ：教員養成系大学における「体育心理学」の講義をめぐって

演 者：杉原 隆（十文字学園女子大学）

司 会：土屋 裕睦（大阪体育大学）

3. キーノートレクチャー2

日 時：9月11日（木）13：00～14：00

会 場：7号館 321教室

テーマ：応用実践科学におけるフィールドの持つ意味—運動学習研究より—

演 者：山本 裕二（名古屋大学）

司 会：荒木 雅信（大阪体育大学）

4. シンポジウム

日 時：9月11日（木）9：00～11：00

会 場：7号館 321教室

テーマ：体育・スポーツ場面における個人差・パーソナリティ要因に関わる研究の課題

司会・企画：中込 四郎（筑波大学）

演 者：鈴木 聡（東京学芸大学附属世田谷小学校）

小学校体育科授業実践における個人差の捉えと授業づくり

竹之内 隆志（名古屋大学）

スポーツ経験とパーソナリティ発達をめぐる研究の課題

荒井 弘和（大阪人間科学大学）

個人差を大切にした研究の実践：現場で得たデータを実践に活用する

5. 口頭発表

日 時：9月12日（金）9：00～10：40

会 場：10号館 407、408教室

6. ポスター発表

日 時：9月10日（水）8：50～10：50

7. 総会

日 時：9月11日（木）11：00～12：00

会 場：7号館 321教室

8. 理事会

日 時：9月10日（水）12：10～13：00

会 場：10号館 202教室

平成20年度日本体育学会体育心理学専門分科会総会議事録

日時:平成20年9月7日 11時10分～12時

会場:早稲田大学 7号館321教室

1. 開会の辞

高妻理事より総会を開催する旨の開会の辞があった。

2. 会長挨拶

猪俣会長より以下の挨拶が行われた。

体育心理学専門分科会会員相互の情報交換を活発にし、体育心理学の研究を推進する点については、企画を立て情報交換ができたと思う。しかし、十分でなかった点として、国際交流について情報発信ができたかが気にかかっている。今後の活発な活動の企画、推進を考えている。

国際交流、国際貢献との関わりもあるが、反省として、社会的な貢献という点で、我々の分科会が果たしている役割が気にかかる。

独立した学会というより、基本的な位置づけとして体育学会の一つの分科会であるということから、体育学という範疇の中での体育心理学であることを考えていく必要がある。他の分科会との連携が密にできないと存在意義が問われるのではないだろうか。したがって、他の分科会との交流を活発に行うことが課題である。

これからは、課題を一つ一つこなして、活発な研究と交流の推進をしたいと思う。是非、皆様のご協力をお願いしたい。

3. 議長選出

総会議長に早稲田大学の正木宏明氏が選出され、議事に入った。

4. 報告事項

1)平成20年度事業報告について

吉川理事長より、資料を用いて以下の報告が行われた。

(1)日本体育学会第59回大会(早稲田大学)における専門分科会活動 について(学会大会委員会)

一般研究発表(口頭9題・ポスター66題、計75題)、キーノート・レクチャー1(参加者120名)及びキーノート・レクチャー2(9月11日午後1時から開催)、シンポジウム(参加者120名)について説明と報告がなされた。

(2)プレセミナーの開催 について(企画委員会)

9月9日午後4時～午後6時に開催された。大学院生を含め90名を越える参加者があり、盛況であった。

(3)体育心理学専門分科会会報の発行 について(広報委員会、事務局)

第19号(通巻第47号)を平成20年2月15日付で、第20号(通巻第48号)を平成20年8月1日付で発行した。吉田理事を中心とする広報委員会と事務局が協力し、平成20年2月1日に専門分科会のホームページを開設した。今後、広報内容を充実していく旨が報告された。

(4)次期役員選挙、理事会運営、その他の庶務および会計業務について(庶務・会計委員会、事務局)

専門分科会関連の次期役員選挙(選挙管理委員 吉川)、庶務会計業務が行われた旨報告された。

2)理事会の開催について

平成20年9月10日に早稲田大学で理事会が開催された旨報告された。

3)その他

専門分科会の会員数について。現会員数は638名である。昨年652名であったことから、14名の減。新入会員は院生中心に30名である。学会全体の会員数は7,273名であり、体育心理学専門分科会会員が占める割合は、全体の約9%、専門分科会の中では第5位の会員数である。

5. 審議事項

1)次期専門分科会役員の選出について(資料1)

吉川理事長より、資料1に基づき、会長、理事、役員の選出結果の説明がなされ、承認された。

また、体育学会の専門分科会選出の代議員選挙が行われ、その結果、阿江美恵子氏、中込理事、吉川理事長が代議員候補者として選出されたことが報告された。

2)平成20年度決算について(資料2)

谷口理事より、資料2に基づき平成20年度決算について説明された。引き続き、決算報告について高見監事より監査報告がなされ、承認された。

3)次期事務局(平成20年大会終了後から平成24年大会まで)の選定について

吉川理事長より、次期事務局として大阪体育大学が提案され、承認された。大阪体育大学の荒木雅信理事より挨拶がなされた。

4)平成21年度事業計画について

吉川理事長より、以下の事業計画が説明され、承認された。

(1)日本体育学会第60回記念大会における企画運営(学会大会委員会)

広島大学にて開催(平成21年8月26日～8月28日)

一般研究発表(口頭・ポスター)、シンポジウム、
キーノート・レクチャー1・2、理事会、総会を企画開催する。

(2)プレセミナーの開催(企画委員会)

(3)体育心理学専門分科会会報第21号(通巻第49号)の発行及び
ホームページの充実(広報委員会、事務局)

5)平成21年度予算案について(資料3)

谷口理事より、資料に基づき説明がなされ、承認された。

6)その他

なし

6. 議長退席

議長より総会の終了が宣言された。

7. 閉会の辞

高妻理事より、閉会が宣言された。

平成 20 年度体育心理学専門分科会理事会議事録

日 時：平成 20 年 9 月 10 日(水) 12 時 10 分～午後 13 時

会 場：早稲田大学 10 号館 202 教室

理事会参加者：猪俣公宏、吉川政夫、吉田 茂、伊藤政展、土屋裕睦、荒木雅信

谷口幸一、高妻容一（事務局選出理事）

松本秀夫(事務局選出幹事)

欠席者： 鈴木 壯、石井源信、佐久間春夫、竹中晃二

<報告事項>

1. 専門分科会関連次期役員の選出について(選挙管理委員 吉川) [資料1参照]

吉川理事長から、日本体育学会(代議員)、専門分科会(会長、理事、監事、幹事)の役員選出については以下の通りであることが報告された。

資料1の通り、次期役員は、会長、理事が選挙により選出された。今後、次期事務局から2名の事務局選出理事が選出され、2名の監事は会員の中から会長が委嘱する旨報告された。

また、日本体育学会専門分科会選出の代議員候補者として、阿江美恵子氏、中込理事、吉川理事長が選出された。

2. 平成20年度事業報告(各委員長)

1) 学会大会委員会

中込理事より、一般研究発表(口頭・ポスター)、キーノートレクチャー2つとシンポジウムを企画し、すでに、杉原 隆氏のキーノートレクチャー1を120名の参加者を得て盛況のうちに終了した旨報告された。

2) 企画委員会

伊藤理事より、昨日、プレセミナーが開催され、奈良教育大学岡澤祥訓氏を演者に迎え、90名を越える参加者があり盛況であった旨が報告された。

3) 広報委員会

吉田理事より、会報19号、20号が発行されている旨報告された。また、2008年2月に体育心理学専門分科会ホームページを開設し、今後充実していく旨報告された。

4) 庶務・会計委員会

谷口理事より、決算報告の説明及び決算報告の監査を受け承認されたことが報告された。

3. 事務局報告

吉川理事長より、以下の内容が報告された。

- ・体育心理学専門分科会活動報告を学会本部に提出した。
- ・名誉会員推薦の件は、該当者が推薦されることを辞退されたため、該当者なしであった。
- ・日本体育学会編集委員を、会長と理事長で検討し、推薦した。
- ・日本体育学会専門分科会選出次期代議員選挙及び体育心理学専門分科会次期役員(会長と理事)選挙を実施した。次期役員の任期は、平成21年4月1日から平成23年3月31日である。
- ・現在の体育心理学専門分科会会員数638名、昨年より14名減少、新入会員30名である。

4. その他

なし

<審議事項>

1. 次期事務局の選定(平成20年大会終了後から平成24年大会まで)

吉川理事長より、事務局(東海大学)の任期満了に基づき、次期事務局として大阪体育大学が提案され、総会に諮る旨、承認された。荒木理事より、次期事務局担当者(予定)として挨拶がなされた。

2. 平成20年度決算報告(庶務・会計委員会) [資料2参照]

吉川理事長より、資料に基づき説明がなされ承認された。

その中で、決算報告に対して以下の質問がなされ、理事長より説明が行われた。

- ・吉田理事より、会計期間について質問がなされ、厳密には総会前までが20年度であり、総会後は21年度となるが、事業・会計年度は大会から次期大会直前までとしていることが説明された。なお、事業・会計年度については昨年の総会でも橋本公雄氏から同様の質問があり、前述のように回答している。
- ・土屋理事より、傍聴記・参加記等の寄稿者の謝礼経費は、シンポジウム経費ではなく、会報の経費としての計上がいよいのではないかと質問された。今後は、次期事務局で検討してもらう旨、説明された。

3. 平成21年度事業計画(各委員長)

1) 学会大会委員会

中込理事より、一般研究発表(口頭・ポスター)、キーノートレクチャー1・2とシンポジウムを行いたい旨説明され、承認された。

2) 企画委員会

伊藤理事より、従来通り、プレセミナーを行うが、内容については、新理事を含め検討する旨説明され、承認された。

3) 広報委員会

吉田理事より、会報第21号の発行とホームページの充実に関して説明がなされ、承認された。

4) 庶務・会計委員会

谷口理事より、予算執行、決算業務を行う旨説明され、承認された。

4. 平成21年度予算案(庶務・会計委員会) [資料3参照]

吉川理事長より、資料に基づき説明され、承認された。

5. 平成20年度総会の開催

1) 司会および議長の選出

吉川理事長より、司会は、高妻理事、議長は、フロアからの提案がない場合、早稲田大学の正木宏明氏にお願いする旨提案され、承認された。

2) 総会次第の進行について

吉川理事長から資料(総会次第)に基づいて説明され、承認された。また、日本体育学会専門分科会選出代議員候補者の役員選挙において、中込理事、阿江美恵子氏(東京女子体育大学)、吉川理事長の3名が選出されたことを総会で報告するか審議され、口頭で述べる事が承認された。

なお、報告事項の報告と審議事項の提案は吉川理事長がまとめて行う。

6. その他

理事会において、伊藤理事から、新理事の担当は、いつ頃決まるのかという質問があり、会長と新事務局において早急に検討する旨確認がされた。また、大会時以外の理事会開催について、会長、新事務局から提案がされたが、来年度予算に理事会交通費は計上されていないこと、また予算的に無理があることなどが説明された。また、現在はメーリングリスト上で理事会の議題を提案審議するとともに報告、連絡が行われている旨の説明がされた。今後、会費の値上げ、委員の任期と事業・会計年度の食い違いの修正、それらの変更に伴う会則の変更などを総合的に検討していくことが確認された。

日本体育学会体育心理学専門分科会

平成20年度 総会資料

平成20年9月 11日

於：早稲田大学

<総会次第>

1. 開会の辞
2. 会長挨拶
3. 議長選出
4. 報告事項

1)平成20年度事業報告について

(1)日本体育学会第59回大会における専門分科会活動（学会大会委員会）

早稲田大学にて開催、

一般研究発表（口頭9題・ポスター66題、計75題）

キーノート・レクチャー1・2、シンポジウム、理事会、総会

(2)プレセミナーの開催（企画委員会）

(3)体育心理学専門分科会会報の発行（広報委員会、事務局）

第19号（通巻第47号）を平成20年2月15日付で、第20号（通巻第48号）を平成20年8月1日付で発行

平成20年2月1日に分科会のホームページを開設

(4)次期役員選挙、理事会運営、その他の庶務および会計業務

（庶務・会計委員会、事務局）

2)理事会の開催について（平成20年9月10日、早稲田大学）

3)その他

5. 審議事項

1)次期専門分科会役員選出について・・・資料1

2)平成20年度決算について・・・資料2

3)次期事務局の選定（平成20年大会終了後から平成24年大会まで）

4)平成21年度事業計画について

(1)日本体育学会第60回記念大会における企画運営（学会大会委員会）

広島大学（東広島キャンパス）にて開催（平成21年8月26日～8月28日）

一般研究発表（口頭・ポスター）、シンポジウム、

キーノート・レクチャー1・2、理事会、総会を企画開催

(2)プレセミナーの開催（企画委員会）

(3)体育心理学専門分科会会報第21号（通巻第49号）の発行

ホームページの充実（広報委員会、事務局）

5)平成21年度予算案について・・・資料3

6)その他

6. 議長退席

7. 閉会の辞

体育心理学専門分科会次期役員の選挙結果について

- ◎ 体育心理学専門分科会会則第6条に基づく次期役員の選挙（事務局担当）
- ◎ 任期：平成21年4月1日～平成23年3月31日（2年間）
- ◎ 投票締切：平成20年5月6日
- ◎ 有効投票数85票（平成20年1月1日現在の会員数644名。投票率13.2%）
- ◎ 開票結果（敬称略，得票順）

<会長> 猪俣 公宏
<理事> 阿江 美恵子
山本 裕二
橋本 公雄
土屋 裕睦
荒木 雅信
西田 保
吉田 茂
佐久間春夫
竹中 晃二
岡澤 祥訓

* 会長及び理事就任承諾済み

* 以上10名の選挙選出理事に事務局から選出された理事2名(庶務・会計担当)を加え、12名の理事により理事会を構成する。各理事は、理事会に設置されている4つの委員会（学会大会委員会、企画委員会、広報委員会、庶務・会計委員会）のいずれかに属し、その業務を遂行する。

* 理事長は、今後行われる理事の単記無記名投票により決定される。

* 監事2名は、会員の中から会長が委嘱する。

平成20年度決算報告

<資料2>

平成20年度決算報告(自 平成19年度大会・総会 至 平成20年度大会・総会前)

○収支決算書

款	項目	予算	決算	差額
収入の部				
	当期収入合計(A)	738,300	785,457	△ 47,157
	前期繰越収支差額	1,291,138	1,291,138	0
	収入合計(B)	2,029,438	2,076,595	△ 47,157
支出の部				
	当期支出合計(C)	1,450,000	1,111,347	338,653
	次期繰越収支差額(B)-(C)	579,438	965,248	△ 385,810
	支出合計	2,029,438	2,076,595	△ 47,157

○収入の部

款	項目	予算	決算	差額	説明
	・前年度繰越金	1,291,138	1,291,138	0	
	・年度会費	600,000	594,000	6,000	1千円×594名 会員数638名(納入率93.1%)
	・郵便貯金(利息)	300	1,237	△ 937	
	・役員選挙実施費用補助金	—	51,520	△ 51,520	
	・体育学会専門分科会補助金	138,000	138,700	△ 700	
	○収入合計(B)	2,029,438	2,076,595	△ 47,157	

○支出の部

款	項目	予算	決算	差額	説明
・分科会会報関連費用	小計	1,000,000	758,450	241,550	会報第19号、20号の2冊発行
	印刷費		563,450		
	会報送料		100,000		1250通×80円
	原稿料 謝礼(会報発行作業補助)		15,000 80,000		
・シンポジウム等関連経費	小計	350,000	240,000	110,000	
	謝礼(演者・司会)		80,000		会員外、会員計6名謝金
	謝礼(傍聴記・参加記等寄稿者)		90,000		0.5万×18名
	専門分科会懇親会補助		0		
	謝礼(写真撮影・大会運営)		0		
	シンポジウム打ち合わせ補助 会員外交通費補助		10,000 60,000		3万×2名
・役員選挙実施費	郵送料、選挙用紙代等	—	73,297	△ 73,297	
・事務局事務費	文具、印刷・コピー費、理事会弁当代	50,000	39,600	10,400	
・通信費	会員・理事連絡費	50,000	0	50,000	
	・当期支出合計(C)	1,450,000	1,111,347	338,653	
	・予備費(B)-(C)	579,438	965,248	△ 385,810	
	○支出合計	2,029,438	2,076,595	△ 47,157	

△は超過

*会員数昨年度652名から638名へと14名減

平成20年 9月 10日

監事 高見 和至

粟木 一博

この決算書は適正であることを認めます。

平成21年度予算案

<資料3>

平成21年度予算案(自 平成20年度大会・総会 至 平成21年度大会・総会前)

○収入の部

款	項目	前年度決算	予算案	差額	説明
・前年度繰越金		1,291,138	965,248	325,890	
・年度会費		594,000	600,000	△ 6,000	1千円×600名
・郵便貯金(利息)		1,237	1,000	237	
・体育学会専門分科会補助金		138,700	138,000	700	
・役員選挙実施費用補助金		51,520	—	51,520	役員選挙なし
・当期収入合計(A)		785,457	739,000	46,457	
○収入合計(B)		2,076,595	1,704,248	372,347	

○支出の部

款	項目	前年度決算	予算案	差額	説明
・分科会会報関連費用	印刷費,郵送料,会報作成補助費等	758,450	450,000	308,450	会報第21号発行
・シンポジウム等関連経費	小計	240,000	250,000	△ 10,000	
	謝礼(演者・司会)	80,000	100,000	△ 20,000	演者等謝金
	寄稿者謝礼(演者・司会・寄稿者等)	90,000	135,000	△ 45,000	大会関係会報原稿料
	会員外交通費補助	60,000	5,000	55,000	会員外の演者
	・シンポジウム打ち合わせ補助等	10,000	10,000	0	
・役員選挙実施費	郵送費、色紙代、文具等	73,297	—	73,297	役員選挙なし
・事務局事務費	文具,印刷費,発送業務・資料整理等	39,600	80,000	△ 40,400	事務補助人件費を含む
・事務局移転費	保管会報・書類の発送費等	—	80,000	△ 80,000	大量の保管会報の発送
・通信費	会員・分科会役員連絡費等	0	10,000	△ 10,000	
・当期支出合計(C)		1,111,347	870,000	241,347	
・予備費(B)－(C)		965,248	834,248	131,000	
○支出合計		2,076,595	1,704,248	372,347	

△は超過

体育心理学専門分科会 理事会より

体育心理学専門分科会 事務局

荒木 雅信

理事会において、下記の3点について審議した結果をお知らせします。

1) 会費について

年会1,000円は、このまま据え置くことになりました。

2) 学会大会発表コード表の見直しについて

現行のコード表は作成時から一度も見直しがなされていません。つきましては、今年度中に見直しを図るための特別委員会の設置が、理事会で承認されました。

コード表見直し特別委員会の委員の選出方法等を理事会で決定・実施し、第60回記念大会での体育心理学専門分科会・総会で決定し、作業に移りたいと思います。

3) 事務局移転に係る会則の一部改正

【会則；附則の部分】

現行；附則 1. 本会の事務局は、総会の議を経て決定する。

改正案；附則 1. 本会の事務局は、総会の議を経て決定し、移転する。

に、改正されました。

以上

編集後記

体育心理分科会の広報委員会委員をしながら、ほとんど貢献していなかった私が、今回、佐久間委員長がご多忙のために、急遽、委員長代理として原稿を集める役を賜りました。昨年まで広報委員長としてこの会報の企画・編集にご尽力された吉田先生のご苦勞がやっとわかった次第です。

さて、委員長代理を突然任され、日本体育学会第59回大会の報告や研究会の活動報告などすでに準備されていた原稿があったとは露知らず、焦って多くの原稿を皆さんにお願いしてしまいました。その結果、今回の会報は、今までにない量にふくれあがり事務局にはご迷惑をおかけしました。また、体育心理学とスポーツ心理学の違いもわからない私が原稿集めをしたものですから、どちらかという「スポーツ」心理学に話題が集中し、従来の会報の方向性と異なっているかも知れません。体育心理学を専攻され、この分野の発展に寄与されてきた諸先輩たちは、体育心理学とスポーツ心理学の線引きにも挑戦されてきました。しかし、運動やスポーツを材料として行う心理学は、世界の潮流として、スポーツ心理学という名称が中心であり、体育の中で発展してきたわが国の方向性とはいくらか趣が異なって見えます。今後、この2つの名称がどのように融合していくのか、また棲み分けられていくのかは、分科会会員の皆さんの活動に委ねられるのだと思います。

今回の会報の中でも、本年6月に国際スポーツ心理学会がモロッコで開催され、多くの日本人が参加されたこともあり、猪俣会長の巻頭言に続いて、海外情報としてこの学会についての記事が多く取り入れています。その他、米国のスポーツ心理学事情についても海外情報もお願いしました。博士論文の紹介は、今回は取得された先生も多くはなかったことも原稿を集める際に苦勞した次第です。

なによりも、ボストン大学ザイコウスキー教授の特別寄稿は読者の皆さんも興味を示していただけたものと思います。彼に原稿依頼を思いついたきっかけは、彼が広島大学で行われる日本体育学会において記念特別講演を行うことになっているからです。8月27日に行われる彼の講演の前振りとして、彼のバックグラウンドや研究内容を紹介しておこうと思い立ちました。ボストン大学での大学院教育やリアルマドリッドとの関わりは皆さんに興味を持って読んでいただければと期待しています。

最後に、60回大学の案内が盛り込まれており、体育心理専門分科会のますますの御発展をお祈りします。

広報委員会委員長代理：竹中晃二

日本体育学会体育心理専門分科会会報 第21号 (通巻第49号)

発行 平成21年8月1日 発行 (非売品)

発行責任者 荒木 雅信 (代表)

発行所 日本体育学会体育心理専門分科会事務局

〒590-0496 大阪府泉南郡熊取町朝代台1-1

大阪体育大学 体育学部 荒木 雅信

TEL : 072-453-8896 / FAX : 072-453-8818 (大学庶務部)

印刷 株式会社RPSセンター
